

recadero de domingo (日曜日よりの使者)

Writehouse

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アナハイム・エレクトロニクスの技術課長である主人公アントニオ・カナーレスは新型MS開発プロジェクトに参加し、そこでエウーゴから出向してきたジャンマリー・ロランというパイロットと出会う。

違う世界に暮らしてきた二人の間にはさまざまなギャップが生じるが、やがてそのギャップがアントニオという男を変化させていく……。

アニメ「機動戦士Ζガンダム」に登場するマラサイというモビルスーツは、初期設定段階ではドミンゴという名前をつけられていた。ただど諸事情によりマラサイに変更された……という制作エピソードに着想を得た小説です。

主な登場人物は三人、一話あたりのボリュームは多くても五千文字程度にとどめてあります。なるべく毎日更新していきますので、よろしければご覧くださいませ。

## 目次

第一話 「あるべき道の果て」	1
第二話 「めぐりあう」	7
第三話 「ラテンの情熱」	14
第四話 「ジオン顔はただけない」	20
第五話 「二度目のデイナー」	28
第六話 「Z計画が落とす影」	31
第七話 「火の玉」	35
第八話 「表層と深層」	41
第九話 「決定的なスイッチ」	48
第十話 「まるで犬のよう」	56
第十一話 「ターニングポイント・前編」	64
第十一話 「ターニングポイント・中編」	71
第十一話 「ターニングポイント・後編」	78
第十二話 「あるべき道・前編」	84
第十二話 「あるべき道・後編」	91
第十三話 「果ての先」	96

## 第一話「あるべき道の果て」

本来ならここで待つべきだということくらい、わかっている。

エアロックの向こうの格納庫が、宇宙とひとつながりの真空だという事実。

自分がこのプロジェクトの現場責任者だという事実。

あるいは、これから眼前に展開するであろう光景が、油断ならない危険をはらんでいるのだという事実。

それでもノーマルスーツを装着したアントニオはエアロックの中心にいて、排気完了の青ランプが灯るのを辛抱強く待っていた。小型のエレベーター程度の箱の中でかたく拳を握りしめ、じっと立ちつくす。排気装置の駆動音が一定の律動で脅迫めいた音をたてる。脇の下がじつとりと汗ばんでいるのを感じる。

「早くしろ……ああ、早くしてくれ……」

ヘルメットの遮光バイザーの向こうには、重たげなエアロックのドア。その上部に横長の長方形に窓が切られていて、さらに向こうの格納庫には酸素がなく、物々しい空気だけが充満している。

消火剤を積載した作業用エレカが、ここから見えるだけでも3輜。

それらの間を忙しげに走り回る、黄色いノーマルスーツたちは様々な機器類の起動準備に余念がない。マスタースレイヴ式の作業用パワーアーム……懸架用のクレーンアーム……大型レーザーカッター…… 有線式レーザートーチガン……あるいはもつと単純に、スパナやレンチを手にしながらその瞬間を待ちかまえる者たちの姿もある。「ジャンマリーなら無事に決まってる……」

アントニオがヘルメットの内にそうつぶやいた時、格納庫内の天井に設置された巨大な黄色い回転灯が、警告のための光を放ちながら回転しはじめた。彼はもちろんのこと、その場にいる全員の視線が弾かれたように防火シャッターへと注がれる。もったいつけた動作でシャッターが解放されていく。七割方シャッターが開いたところで、ランチと呼ばれる小型艇が文字どおり滑り込むように庫内に進入してきた。それは格納庫内に駐機しているランチと同じ型式のもので、

コックピットハッチとボディ側面にはへドナのD<を  
示す英文が書かれてあった。

軍隊のコールサインを真似て、一機々々のランチにはそのように  
ニックネームがつけられていた。クリステイナのC。ジャネット  
のJ。アジア系、少紅シヤオホンのS。使われているアルファベットがバラバ  
ラに散っているのは、この格納庫にランチが4機しかないせいもある  
のだが、しかし言ってしまうればこれらの名前に社内の美人女子社員  
の名前を拝借しているというのが最大の理由にして真相であった。

そしてたつたいま帰還を果たしたばかりのへドナのD<は、整列す  
る姉妹たち同様に酷使され薄汚れていたが、それが彼女だと識別す  
るために書き込まれたせつかくの名前、その下のスペースだけがぼっか  
りと白く、ハッチも横つ腹もまるで新品のようにわざとらしい色味を  
さらしていた。

数時間前までそのスペースには、彼女の姉妹たち同様、アナハイム・  
エレクトロニクスのロゴマークが自慢気に描かれてあった。それを  
白い塗料で塗り込めてしまったへドナのD<は、外見だけを見るなら  
何処に籍を置くランチなのか判然としないものに変わり果てていた。

所詮子供騙しにすぎない。だが気休めにも似たそんなカモフラ  
ージュを施してまで、彼女は出かけなくてはならなかったのだ。そうし  
て腹にコンテナを抱え、荷物を満載して帰ってきた。

係留作業を終えたへドナのD<からコンテナが分離され、天井に消  
火剤噴射口が設置されている真下、防火フェンスで仕切られた一角へ  
と移動させる作業が始まった。ちょうど窓越しに様子をうかがうア  
ントニオの方に迫ってくる恰好である。

コンテナを吊り下げたクレーンが所定の位置にたどりつくと、床に  
下ろされたコンテナの壁面が、まるで素敵な贈り物のように四方にむ  
かって展開しはじめた。アントニオは憂鬱な面持ちでその様子を眺  
めながら、同時に視界の隅に青い光をとらえた。弾かれるように目を  
やれば、コンソールパネルに排気完了の青ランプが灯っている。逸る  
気持ちを押さえてエアロックのドアが開くの見届けると、彼は三段  
跳びに飛び跳ねながら、六分の一の重力の世界へと文字通り飛び出し

ていった。

\*\*\*

『そのあなた……ここは危険です……引き返して下さい』

青色のノーマルスーツ——肩と胸のワツペンが保安要員であることを示している——のひとりだが、現場に飛び込んできたアントニオに気づいて、そう手信号を送ってよこした。頭に血がのぼった状態のアントニオはヘルメットの通信スイッチを切ったままだったのだ。

それを見透かしたようにヘルメットのこめかみあたりをコツコツ叩きながら、保安要員は『通信がオンになっていないんじゃないか?』というジェスチャーをしてみせた。

アントニオは舌打ちとともに手近な足がかりを蹴ると、青いノーマルスーツのほうへと跳んだ。保安要員に手を伸ばしてこちらに引き寄せ、頭を打ち付けるような激しきで互いのヘルメットを接触させる。相手はバイザーの向こうで目を白黒させているに違いない。だがいちいち気にかけてやれるような余裕はない。

「状況はどうなっている? パイロットは!?!」

「カナールス課長!……ここは危険です、下手を打てば爆発の危険があるんですから……その、申し訳ありませんが、退出していただかなくては」

「状況はどうなっていると聞いている!」

思わず声を荒げたアントニオだが、プロジェクトの現場責任者である自分がこんな鉄火場に割り込んでくれば、何をしたところで邪魔になつてしまうであろうことを承知してはいた。

しかしオフィスのモニター越しに作業の進捗を眺めたり、そこで指をくわえて報告を待つような気には到底なれなかったのである。なんとなればヘドナのD<が回収してきたモビルスーツヘドミンゴ<が残された最後の試作機であり、そのコックピットに座っていたパイロットが唯一無二のテストパイロットであり——そしてかけかえない友人であることを認めざるをえない人物だったからである。

「状況は……」

多少うろたえた口調で保安要員は質問に答えようとしていた。そ

の視線はコンテナから姿をあらわしたモビルスーツへと釘付けに  
なっている。

正確には、モビルスーツだったものだ。

いまやドミンゴは残骸以外の何もものでもなかった。濃紺と赤に塗  
り分けられ、その内に数々の新機軸を搭載したMSの姿は、もはやど  
こにも見当たらなかったのである。

「……状況はご覧のとおりです」

保安要員がそう言っても、アントニオは返事をしなかった。ただ眼  
前の残骸を呆然と見つめ続けている。

「機体特定を避けるために装甲外殻のたぐいはすべて回収したはずで  
す……それから、新型ジェネレーターまわりを最優先に、持ってこら  
れる物は全部持って帰ってきたはずですよ。ああ、見て下さい、いま  
プロペラントが外されましたよ……この分だと二次爆発は避けられ  
そうですね」

かつて人型だったその機体は、ビームライフルの直撃を受けて爆発  
四散したのだった。アントニオがその報告を受け取ったのはおよそ  
2時間前のことである。即座に彼を行かせたことを後悔したが、プロ  
ジェクトを管理する者の列に名を連ねるアントニオにはしばしの感  
傷に浸る猶予は与えられなかった。

そもそも彼にとつて、すべてが未確認情報に過ぎないのだ。本当に  
戦闘はあったのか。本当にドミンゴは撃墜されたのか。彼は――  
ジャンマリー・ロランは本当に死んでしまったのか。

瓦礫の山と化したドミンゴを作業員たちがどんどん解体してゆく。  
ビームライフルを握ったままの腕がクレーンにつられてゆく。優美  
なフレアを描いていた脚部のスカートがレーザーカッターで切断さ  
れてゆく。そこに内蔵されていたプロペラントタンクが慎重な動作  
で取り出されてゆく。

真実が明らかになるのは、何もかも終わってしまった後だ。いつも  
そうだ。今になってその顛末が無言の圧力をもって眼前に突き付け  
られる。

クレーンが胴体に相当する部分をつり上げ始めた。そこにあるべ

き頭部は失われ、背部プロペラントの爆発によって何もかもが歪み、黒く焼け焦げている。クレインのワイヤーがぴんと張りつめ、瓦礫の山から胴体を引きずり出していく。衆人環視の前に胸部があらわれ、ならば次に腹部があらわれるはずだった。

だが、やがてあらわれるべき腹部——すなわちコックピットブロックはそこに存在していなかった。胸の下には巨大な穴が穿たれており、まさに皮一枚で腰部ブロックとつながっている有様だった。

すかさずレーザーカッターがその皮にあたる装甲材を切断し、胸だけになったパーツがクレインで運ばれていった。

アントニオはパイロットの安否を確認しようと思ってこの場に来たのだったが、さらなる質問を浴びせる代わりに、彼に腕をつかまれっぱなしだった保安要員を解放してやった。青いノーマルスーツは軽く会釈をすると足場を蹴り、いまだ作業が続くドミンゴの方に跳んでいった。

それらに背を向けたアントニオもまた足場を蹴った。再びエアロックの扉をくぐり、コンソールの吸気メニユーに指を触れた。

ノーマルスーツから背広に着替えたアントニオがエアロックを出ると、アナハイム・エレクトロニクスの水色の制服に身を包んだヘドナのD〓ことドナ・ロペス・ガルシアが、両手の指を所在なげに絡めたり解いたりしながら立っていた。アーモンド型の大きな瞳でアントニオを上目遣いに見た彼女は、栗色の髪を指先でもてあそびながら口を開いた。

「ジャンマリー准尉は……?」

アントニオは彼女の方を見なかった。うつむいた彼の視界には自分の靴の爪先しか映っていなかった。

「直撃だったらしい……脱出カプセルも何も、残っていなかった」

「そんな……」

歩み寄ったドナが、アントニオの肩にそつと手を置いた。

「嫌ね、戦争なんて。早く終わってしまえばいいのに」

彼女がその言葉を言い終えない内に、アントニオは乱暴な仕草で彼女の手を振りほどいた。



「君が痛ましいかと思っっているのは一体どっちのことだ？　パイロットか、それともドミンゴのことを言っているのか!?!」

一瞥をくれることもなく吐き捨てる、アントニオはそのままオフィスへ向かって足早に歩き出した。

すげなくほどこかれた白い手をもう一方の手のひらで包みながら、ドナは憂鬱な表情で彼の背中を見送った。

この数ヶ月でアントニオという人間が劇的に変化していったことは、傍で見ていたドナにもわかっていたはずだった。変わってしまった彼に届くような言葉を、いまのドナは持ち合わせていなかった。

どこにいけばそれが見つかるのだろうと彼女は思った。どうすれば彼に届く言葉を見つけられるだろう。

## 第二話 「めぐりあう」

「エウーゴから来た、ジャンマリー・ロラン准尉だ。宜しく頼む」

振り返れば、アントニオがジャンマリー・ロランという男と出会ったそもそのきっかけとは、わずか数枚の書類によって生み出されたものだった。

わずか数枚。しかしこれはちっぽけな書類などではなかった。安易な複製や流出を避けるために本物の紙が用いられ、必要とされる部分には肉筆による記入がなされていた。いくつか捺印された箇所もあった。

それはエウーゴ（A・U・E・G・：反地球連邦政府）が機密保持指定を付与したうえで発行した重要書類であり、その内容が地球圏に勤務していたアントニオをアナハイム・エレクトロニクスのグラナダ月面工廠に召喚し、同様にジャンマリーという軍人を民間人に偽装させ、念には念を入れ、わざわざ中立コロニーのサイド6から一般客に混じって民間シャトルでグラナダ入りするという、面倒な手順を踏ませることになった。

そしてジャンマリーは件の書類へ次期主力モバイルスーツの開発に関する要求仕様書を携えて、グラナダ市のはずれにそびえるアナハイム月面工廠の門をくぐり、彼の到着を待ちわびていたアナハイムの社員たちに迎えられたのだった。

社員といっても、みな三つ揃いのスーツに身を包んだ、それ相応の役職に就いている者たちばかりである。長期的視野で見て大きな意義をもたらす可能性が高い今回の商談には、そういった面々が集うだけの価値があった。

その末席に腰を下ろしていたのが周囲の空気に気圧されつつあったアントニオである。皆が拍手なり賛辞でもってジャンマリーに歓迎の意思を表明する中、彼はこの見慣れない来訪者をひたすら凝視するのみだった。

軍人というものを間近に見るのはこれが初めてのことだったが、その第一印象には奇妙な違和感があった。それは目の前にあらわれた

この男がひどく無愛想な口のきき方をするせいなのかもしれない。軍人である以上、あまりぎつくばらんなことは口にできないのかもしれないが、とくに愛想笑いをするでもなく淡々と述べられた自己紹介は、どことなく威圧的ですからあるように思われた。

どうなのだろう。軍人というのは、皆こういうものなのだろうか。それとも彼の所属するエウーゴがきわめて緊張した状況下にあるがため、それが些細な振る舞いにあらわれただけなのだろうか……。

エウーゴがスペースコロニー「グリーンノア2」の地球連邦軍施設を奇襲し、施設内において極秘に評価試験中だった新型MS2機を強奪するという事件が発生してから、十日ほどが経過していた。連邦軍にとつて面目丸つぶれとなったこの不祥事はニュースでも報じられ、当時まだ地球で勤務していたアントニオですら知るところである。

しかもこの騒動はこれで幕を下ろすことを許されず、その数日後に連邦の特殊部隊である「ティターンズ」の尉官が、さらに試作MS1機をとまなつてエウーゴに投降するというおまけがついた。

このようにして3機建造された試作MSはすべてエウーゴが手中に収めるところとなり、その一連の流れは続報として連日ニュースを賑わせ、軍予算のおおもとである納税者、すなわち民衆は、日頃の不満に勢いを乗せて一気に連邦批判へと傾いたのだった。

連邦軍広報部はこれらの報道に対して情報規制をかけたが、これはまずい一手だった。ティターンズが関与していると伝えた一部のメディアは「強硬な手段」をもつて沈黙させられたと噂がたったし、それを裏付けるようにTVニュースや大手ニュースサイトは不自然なまでにこの事件を取り扱わなくなった。スタジオのコメントーターが突然降板したり、アーカイヴに保存された記事が削除されたりした。

そこまでしておきながら、草の根的なアンダーグラウンドサイト界限に至ってはどうにもならなかった。ほとんどいたちごっここの様相を呈していた。

結局人の口に戸はたてられなかったし、民衆の不信感払拭できなかった。連邦軍は決して事実と認めることをしなかったし、とくに

テイターズとの関与を強く否定したが、否定すればするほど事実と認められているようなものだった。

こうなった以上、連邦軍は世論へ強くアピールする形でエウーゴへの対策を打たなくてはならない。その結果導き出されたもつとも明快なパフォーマンスが武力行使であり、今日に至るまでに散発的な戦闘が宇宙のあちこちで繰り広げられていた。

そんな騒動はアントニオにしてみれば対岸の火事、いわば別世界の出来事なのかといえば、実際のところこれがあながちそうともいえない。アナハイム・エレクトロニクスという企業はいまや世界でも有数のコングロマリットであり、そして彼が籍を置くジェネレーター部門は兵器と密接な関係にあることを否定できないのだ。

そもそも、そのジェネレーターのために月まで呼ばれたのである。第一、エウーゴがグリーンノア2に奇襲を行った際に使用したMS〈RMS-099:リックディアス〉からして、非公式ながらアナハイムの製品であったし、身も蓋もなく言ってしまうえば、アナハイムはエウーゴの活動資金の大半以上を担っている筆頭出資者なのである。そのアナハイムにエウーゴから打診されたのが、主力となりうる新型MSの開発であった。

もともと地球連邦軍から分裂した組織であるエウーゴには、連邦でも運用されている〈RGM-179:ジムII〉があつたが、もう7年も前になる一年戦争のロートル機、そのマイナーチェンジに過ぎないこの機体はあまりにも脆弱すぎた。

では新型のリックディアスはどうなのかといえば、重MSに分類されるこの機体は汎用機とは言い難く、また何よりもまず高価すぎるのであった。

このような流れを経て、グラナダ月面工廠において新型MSのための開発チームが編成されることになり、アントニオには新型MSに搭載するジェネレーターを設計するという職務が与えられた。電力供給の要であるジェネレーターは、機体の心臓部ともいえるエンジンとともに非常に重要な要素であり、それだけに花形の部門であるということが出来る。

実際アントニオは、ついに大きなチャンスが巡ってきたと思っていた。この大宇宙時代に地球にしがみついて働くというのは何ともやるせない。アナハイムにしてもそんな彼の思いを裏付けるように活動の場を宇宙に求めている。ならばこれを機に継続的な宇宙勤務への足がかりを作りたいと考えるのは、決して絶えることのない上昇志向に身を焦がすサラリーマンであれば、むしろ当然の欲求であるといえた。

いまアントニオは、そのための最初のチケットを手にいれたところであった。期待と興奮、緊張といったものがないまぜになり、武者震いするかのように彼の身体を小さく揺らした。

平気な顔をよそおって顔を上げると、今回のプロジェクトの責任者であるマクローリン設計局長が形式ばった挨拶を終えたところだった。つづけて彼はアントニオを紹介するべくこちらに向かつて片手をひるがえし、それに応えるようにアントニオは立ち上がった。

「彼が今回のプロジェクトの陣頭指揮を執るアントニオ・カナレス設計課長です。また彼自身にはジェネレーター班における設計・建造を兼任してもらうことになっておりまして……そうですね、この男がプロジェクトの成否を握っていると言っても、決して言い過ぎにはならないでしょうな。まあ、カナレス君はカナレス君で今後の進退にかかわる大仕事になるわけですから、尻を叩かずとも死にもぐるいの働きぶりを見せてくれること間違いなし、そこは私が保証いたしましよう」

「アントニオ・カナレスです。今後ともよろしくお願いします、准尉」

手を差し出すと、ジャンマリーが立ち上がりその手を握った。

立ち上がったジャンマリーは座っている時よりも小柄な印象を周囲に与えた。かつての戦闘航空機パイロットや競馬の騎手の第一条件が「小柄」であったように、MSパイロットもまた小柄な人間が歓迎されるのだろうか。全周マルチスクリーンの球形コックピットにはなんだか広々としたイメージがあるが、考えてみたらアントニオには32年のこれまでの人生の中でMSのコックピットに座った経験

など一度もないのだった。

だが、いくら小柄であろうとも、ジャンマリーが放つ違和感めいたものは幾分も薄れることがなかった。握手のできる距離まで近づいてみれば、瞼まで垂れ下がった黒髪の奥から、一對の碧眼がまるで値踏みするかのような眼差しでこちらを凝視していた。

この若い准尉は明らかに殺気立っていた。長雨で何日も狩猟の興奮を味わえないでいる猟犬のようなおもむき——いかなれば匂いのようなものを、眼のみならず身体中から立ちのぼらせているのだった。そんな考えに思い至ったアントニオは、なかばふりほどくようにして握られっぱなしだった手をひいた。

「こちらこそ宜しく頼む——思っていたより若いのは意外だったが、死にもものぐるいで働いてくれるのなら、こちらとしては大いに結構だ」

席につきながらジャンマリーがそう返し、居並ぶ面々は微笑とも苦笑ともつかない、さぎ波のような声をたてた。アントニオは急速に頬が紅潮するのを禁じ得なかった。

この軍人は一体何だというのだろう——礼を失するにも程があるのではないか？

視界にジャンマリーを入れないように俯いたアントニオは、顔のほてりが収まるのを待ちながら、あれこれと考えをめぐらせた。たとえば彼は、自分のような若いスタッフが現場を取り仕切ることが気に入らないのだろうか。だとしたら冗談ではない。吟味もしない内から無能扱いされるのであれば、それはエンジニアにとって最大級の侮辱である。

たしかにノーネクタイであったり、薄汚れた作業着のままでもフィスをぶらぶらする連中にもいるにはいる。そういった手合いは決して多くはないが、それだけに目につくのもまた事実だ。だがそういった服装で勤務する特権がエンジニアに許されているのは、彼らが訪問販売のセールスをやっているのではないからだ。

彼らの商売道具はその頭に詰まった脳味噌であり、指先がつむぐ神業なのだ。髭をいつもきれいに剃っておく潔癖さや、毎日糊の利いた

シャツを着てくるか、いしきというものは、彼らの仕事ではないのである。

たとえば寝癖のついた頭であろうが、昨日と同じシャツを来ていようが、知ったことではない。他の誰にもできなかった、あるいは時期尚早とされていた技術的難問をクリアすることこそが彼らの役割であるからだ。エンジニアとはそういうものだ。

アントニオに限っては、身なりもきちんとしている自覚があった。高級ブランドとはいかないが、今日来ているスーツだってシワひとつないはずだし、腕時計だって会社員相応のものを選んでいるはずである。

それにもかかわらず、なぜあのような目つきで睨みつけられなくてはならないのか。

若いのか若くないのかという話でいえば、アントニオの目にはジャンマリーの方が自分よりずっと若く見えた。つやのある黒髪といい、しわの刻まれる気配もない張りのある顔、その色つやといい、前髪を透かして見える猛禽めいた大きな目といい、古びた気配はどこにも見当たらない。

その立ち振る舞いが陰を落とすせいもあって、さすがに十代に見えるはしないものの二十代半ば、あるいは後半といったところだろう。少なくとも自分よりも年下だと思っておいて間違いはあるまい。

秘書課の女性たちがお茶を乗せたワゴンを押しながら入室してきた。奇麗どころばかりの彼女たちがそれぞれの席に飲み物を配って歩く間に、あらかじめ要求仕様書にもとづいて作成された資料が配布されると、室内はにわか高級幹部会議の様相を呈しはじめた。

あいかわらず気後れする感があるものの、先々のことを考えればこんな空気にも馴染んでおかなくてはならないだろう。そう自分に言い聞かせて、アントニオはエウーゴとアナハイムのロゴが並んで印刷されている表紙をめくった。

ちらりと盗み見れば、ジャンマリーもまた真剣な目つきで資料に目を落としている。だがパイロットであるのならそれも当然かもしれない。ゆくゆくは彼自身もまた、この機体を駆って戦場を駆けめぐ

のかもしれないのだ。愛想のひとつも見せなかったが、最高の機体を作り上げたいという熱意なら、きっと彼とて誰にも負けないものを持つているのだろう。そして、その熱意こそテストパイロットにもっとも求められるべき資質である。

幸い、アントニオが担当する新型ジェネレーターの基本設計は地球にいる間に済ませてあった。ひとまず試作機の建造が大詰めを迎えるまでは現場管理の業務に重点を置くことができる。

その期間内に彼との間にしっかりとした信頼関係を築いておかななくてはなるまい。こちらに最高の機体を作る自信がある以上、そのシートに座るパイロットには最高の能力を発揮してもらわなければならないのだから。

そんなことを考えているとジャンマリーがふと視線を上げ、例の射すくめるような目でこちらを見た。そして、まるで視界には何も映らなかったとでもいうふうに、再び視線を落とした。たったそれだけのことなのにアントニオは手のひらに滲んだ汗がすつと冷たくなっていくのを感じずにはいられなかった。

こんな男を寄越すなんて——エウーゴには、他にもっとましな人材はいなかったのか。底抜けの社交家ではないにせよ、たとえば目が合えば何らかのリアクションを返してくれるような人間味のある人材は。

順風満帆、快走のままゴールまでたどり着ける仕事だと高を括っていたアントニオは、その前途に暗雲の立ちこめるのを見た。ちょうど船に乗り込んだばかりだというのに、この先どうなるのか、とてもじゃないが知れたものではない。

アントニオは所在なげにスーツの膝で手の汗を拭いた。



### 第三話 「ラテンの情熱」

自己紹介を交わしてから、わずか数時間後。アントニオは、ジャンマリーとうち解けるのが並大抵の仕事ではないということを知った。

しばらくグラナダに滞在するジャンマリーには色々準備が要った。それら諸々の雑用は、アントニオの秘書としてプロジェクトに加えられた女性社員ドナ・ロペス・ガルシアが担当してくれることになったのだが、アントニオは積極的に彼女を手伝う気だった。何よりもまずジャンマリーの人となりを知らなければならないと思っただけである。

しかしそれも最初の一日だけで済ますことができなくなった。部屋をあてがってしまえば、あとはとりたてて準備するものもなかったのだ。

情報の漏洩を防ぐためか、あるいは単に経費の削減なのか、ジャンマリーが住まうことになったのは、アナハイム系列企業の従業員用に建設された住宅のひとつだった。

そう言ってしまうえば随分けちくさく聞こえるが、 magari なりにも一流企業である。とくに彼のために用意されたのは非組合員のための社員住宅であったから、それなりに金がかけている。広いリビングからは本物の土を使った庭を眺めることができたし、キッチンには最新の設備が揃えられている。ベッドは値の張る逸品だという話だし、それをいうならカーペットひとつとっても様々な機能の付加された最新式らしかった。

普通に賃貸でこの部屋に住もうと考えても、家賃の支払いさえまかならなくなる連中がごまんといるだろう。一流企業の社員であればこそ、こんな部屋をただ同然に使うことができるのだ。

そういうこともあって、内心アントニオは少し自慢げな気持ちでもあった。反地球連邦政府などと名前こそ立派にぶち上げてはいるが、結局のところエウーゴとは地下組織に過ぎない。組織の末端に位置するであろうジャンマリーなど、一体どの程度の暮らしを送っている

のか知れたものではないと踏んだのだ。

だいいち、この男は三十路に手が届くか届かないかの年齢に見える。こんな高級住宅に足を踏み入れるなど、初めての経験であってもおかしくはない。

「グラナダ滞在中、ロラン准尉にはこちらで過ごしていただきます。とりあえず中を案内しましょうか。家族用につくられていますから部屋数が多いんですよ。おひとりじゃ寂しいかもしれませんが……」

愛想よくそんなことをいいながら、ドナがひと部屋ずつジャンマリーを案内してまわった。リビングから出ていく二人を見送ったアントニオは、あらためて室内をぐるりと見わたし、満足そうな微笑を浮かべた。

壁ぎわに設置されたTVモニターは巨大だったし、リビングにはモニターの巨大さを持て余さないだけの広さがあった。アルコール状の壁のくぼみには暖炉を模した高級そうな暖房器具が備えつけられている。壁には何という画家が描いたのか知らないが、きつと高値で取引されているはずの油彩画が額装されている。

知りもしない画家の作品を高値だと思える根拠は、それがアナハイムの非組合員用住宅に飾られているからだ。ここはそういう場所だ。安物を置いてよい道理はない。

いい部屋だ。こういう部屋に寝起きすることそれ自体をステータスと感ずることができると、ほんとうにいい部屋だ。

アントニオの微笑は、もしかしたら多少締まりのない、にやけ面になつていたかもしれない。彼は棚の上に置かれたオブジェ——アナハイム・エレクトロニクスのロゴマークをかたどった底抜けにつまらない代物——を手に取り、それをまじまじと眺めながら、やがてほんとうに笑い声を漏らした。

「うふふふ……」

その途端廊下に足音が近づき、すべての部屋を一周しおえたドナとジャンマリーが戻ってきた。動揺したアントニオは何でもないふうを装いながら咳払いし、口のまわりを片手で軽く拭いた。

秘書課の人間だけあつて澆刺と出発したはずのドナは、ひとまわりする間に様子が変わり、すっかり黙り込んでしまつていた。ジャンマリーもしゃべらないので、3人揃つたところで場が和むこともなく、なんだか間の抜けた沈黙が流れた。

アントニオは何とか空気を換えようと、とにかく口を開いた。

「どうですか？ 社員住宅とはいええ、なかなかのもんでしよう。私も同じタイプの社宅を使っているんですが、じつさいひとりだと持て余すくらいです。准尉にもグラナダ滞在の間は快適に過ごしていただけたと思いますよ」

「そうだな。この部屋で特に問題ない」

空気をやわらげようとつとめて朗らかに話してみれば、あつという間に沈黙に舞い戻つてしまった。あきらかにこの軍人には他人を拒絶するムードがある。

「准尉はその……酒はやらないんですか？」

グラスをかたむける仕草をしてみせながら、アントニオは馬鹿みたいなことを言つたかもしれないと思つた。

「酒は飲む。たしなむ程度だがね」

「そうですか、それはよかつた！ それじゃ近いうちにぜひ……」

「そんなことよりも、私のことを准尉と呼ぶのはまずいな。軍人だと丸わかりになつてしまう」

やっと打ち解けられそうな話題を見つけたかと思つたら、不自然なくらいの唐突さで話を逸らされてしまった。お前と仲良く酒を飲む気などないということだろうか。やはりこの男には他人と距離を置こうとしているふしがある。

アントニオはこれみよがしにため息をつくど、ふたたび口を開いた。

「おつしやりたいことはわかりますが、では何とお呼びすれば……」

「好きなように。ジャンマリーでも、ロランでも」

「はあ……では、その、ロランさんにはこちらに住んでいただくことで決まりとして、他に何か必要な物はおありですか？ あれば希望に添える範囲で用意しますし、グラナダの街へ出たいということなら、こ

こちらのガルシア君や私が同伴して案内しますが……」

「特に希望はない。当然だが、出かける用事もないな。他に用件は？」  
「いえ……ええと、では明日からは通常の社員と同じように行動していただくという事です。これが社員証です。准尉……ロランさんが立ち入って問題ない区域であれば、これ一枚で通過することができま  
す」

「そうか……それにしても平和なものなんだな」

「えっ、なんですか？」

社員証のIDカードを受け取りながらジャンマリーがぼそりと何か言ったが、あまりにも小さな声で聞き取れなかった。アントニオがその顔を覗き込むと、とっさに彼は視線をそらせてしまった。

「いや、なんでもない。他に用件は？」

「ええと、あとは特別何もありませんね……明日の9時半頃にこちらのガルシア君が迎えにきますから、それまでに支度を整えておいて下さい」

「了解した。今日はわざわざご苦労だった」

そう言うと、ジャンマリーはさっさと奥の部屋に引っ込んでいった。アントニオとドナはしばらくリビングに突っ立っていたが、特にやり残した用事があるわけでもないのです、そのまま部屋を後にした。

わずか1時間足らずで用事はすべて済んでしまった。

\* \* \*

「軍人つてのは、みんなああいうもんなのかなア？」

帰途についたエレカの中、アントニオが消化不良気味にそんなことを言うと、ハンドルを握るドナも同意するように何度もうなずいた。「課長もそう思いました？ もう、ぜんぜん会話がキャッチボールにならないんですよ。正直に打ち明けますけど、ちよつと苦手なタイプかもしれないです……」

「わかるよ、ぶっきらぼうにも程があるっていうかさ」

「そうですよ。せっかく部屋を案内して歩いても眉ひとつ動かさないんです。バスルームでもキッチンでも、何を見てもただへうん、うんぐって唸るだけで、良いも悪いも何もないんですよ!？」

「まあ……ついこの間までドンパチやってる連中の中にいたわけだからなあ。どのみち我々とは人種が違うってことなのかもしれないね」  
「だけど、なんだか印象悪いですよ……もう少し喜んでくれたついでに。もう、あんなに立派な部屋ならあたしが住みたいくらいです」

「そういうことなら、僕の部屋も准尉と同じタイプだよ」

アントニオがこともなげにそう言うと、ドナは意外そうな顔をしたが、そのあとで少し微笑んだ。嫌われてはいないとアントニオは思った。

「もう、准尉なんて言ったらまた文句を言われますよ、課長」

「そういえばそうだったね。じゃあ、君が僕のことを課長と呼ぶのもよくないのかもしれない……僕がアナハイムの社員だということがばれてしまう」

ジャンマリーの口調を真似れば、ドナが膝を揺らして笑った。

「そんなこと言ったって、このエレカには大きなロゴマークが入ってるんですから！ それにあたしの制服の趣味の悪い水色！ 対向車のドライバーにだってあたしたちがアナハイムの社員だってばれちゃってますよ」

「それじゃ僕は君に一生課長と呼ばれなくちゃならないわけか。いきなりファーストネームで呼んでくれとは言わないが、なんとも寂しい限りだね。街なかをふたりで歩く時も、君は僕を課長と呼ぶのかな？」

「うーん、そんなシチュエーションがあれば、その時に考えますけど？」

「じゃあ早急に考えてもらいたいな。グラナダ入りして間もないのは、何もロラン氏に限った話じゃないからね。お忘れかもしれないが、僕だってグラナダに赴任してきたばっかりなんだ。できれば美味しい地中海料理を食わせるレストランのひとつでも紹介してもらいたいところだけど……名前から察するに、君もスパニッシュだろう？」

「でも宇宙生まれですから、名ばかりのスパニッシュですけどね。オリーブの香りとか、あたしっつたらもう、ぜんぜん駄目ですし」

「なんてことだ！」

ジャンマリーと話していた時の何倍もスムーズに言葉が繰り出された。脳裏にイメージが湧く。ギアがしっかりと噛み合っている。潤滑油はまんべんなく会話にいきわたっている……。

「それじゃ、君はスパニッシュというよりはスペースノイドってわけか……ということは君の中にラテンの情熱とでも呼ぶべき熱き血潮は流れていないのかな？」

「そんなことはないと思いますけど……あのこれって、課長はあたしを食事に誘ってくれているんですよね？ それとも、もしかして本当に地中海料理の店を押さええておきたいだけなんですか？」

「せっかく素敵なお嬢さんとふたりつきりになって、単にうまい店情報聞き出す馬鹿もいないと思うがね」

そう言うどドナが再びクスクスと笑った。

「そういうことならロブスターの美味しい店を紹介して差し上げましょう。それから、呼び方を変えるっていうのも前向きに検討させていただきますわ。課長のファミリーネームは……」

「カナレスだよ。アントニオ・カナレス」

「カナレス」

ドナがアントニオの姓を復唱すると、彼はなんだかくすぐったい気持ちになった。

## 第四話 「ジオン顔はいただけない」

新型MSの原型機、すなわちプロトタイプ第1号機の建造は破竹の勢いで進行していた。その主な理由は、設計ベースを現在の地球連邦軍主力MSとなつている〈RMS-106：ハイザック〉に求めたところが大きい。

アントニオに旧ジオンへの格別の思い入れがあるわけではない。本格的な戦争がしばらくなかったため兵器の刷新が停滞気味の昨今ではあつたが、その中であつて新鋭機と呼ぶに値するものがそれしかなかっただけの話である。

連邦の、いわゆる純血機種であるGMⅡに至つてはロートル中のロートルであるわけだから、もとより他に選択肢がなかったのだ。

だがハイザックとて決して悪い機体ではない。すべてのMSの始祖となつた〈ザク〉の直系の子孫である。ただ設計思想的に旧態依然としており、これをいわゆる〈第2世代MS〉と呼ばれるカテゴリーに引き上げる――すなわちジオン系MSのひとつの完成形を導き出すというのが、このプロジェクトの側面であるともいえた。

第2世代ということは、すなわちハイザックも搭載している全天周囲コックピットとリアシート、それに加えてムーバブルフレームといった最新の水準に規格を合わせていくことである。その上でアナハイムも開発に寄与したハイザックのデータを叩き台にし、それを超える性能の機体を現出せしめるのだ。

ハイザックを凌ぐ機体。さしあたっては限界稼働時間の拡大、最新素材による装甲、そしてビーム兵器の複数同時運用能力などといったところである。

ハイザックはジェネレーターの電力供給限界から、ビーム兵器を一度に複数使用することができない。白兵戦でビームサーベルを抜こうと思つたら、その代償にライフルは電力供給をカットされ、途端にデッドウェイトと化してしまう。

現在開発中の機体ではその問題を克服する予定で、そのために大きな役割を果たすことになるのが、アントニオが基本設計を手がけた新

型のジェネレーターだった。

プロジェクト名はヘドミンゴと名付けられた。スペイン語で日曜の意味を持つこの名称は、プロジェクトの現場統括者であるアントニオの一存で決定されたものだった。

だがなぜこのような言葉を選んだのか、その理由はアントニオ自身にも判然としていなかった。何となくそうしてみた、気まぐれだったというわけではない。むしろ彼には「この名前にするのがいいな」と思っただけで感覚が残っている。

じっくり腰を落ち着けて考えれば、何か思い出せることもあるかもしれない。だが今はそうするべき時ではなかった。彼にはやるべきことが山ほどあった。

プロジェクトに召集されたスタッフの大半は、ハイザック開発に携わった経験を持つ者たちだった。そこには旧ジオン系の技術者も多数含まれていた。

旧ジオン。それはつまり、かつて宇宙移民の主権国家独立を謳った亡国の出身者たちである。かの国の野望は地球連邦が叩きつぶしてしまったわけであるから、地球出身のアントニオは何となく不安に思う部分もあったわけだが、ジャンマリーの場合と比べる間でもなく、彼らは友好的に接してくれた。

「ハイザックには俺たちも不満があったからね。やり残したという気持ちがあった」

休憩時間には各部門のエンジニアが集まって雑談に花を咲かせた。

「まったく不満だったよ。なんせOGRと違うところなんて、いくらもない。そりゃあいくらかわったが、とりたてて新機軸を盛り込んだわけでもない。やっててつまらないといえ、あれほどつまらないものもなかったな」

「GMの仕様替えの方がずっと退屈だったんじゃないか？」

「あんなのは仕事のうちに入らねえよ。まあやっててつまらねえっていう点じゃいい勝負だったけどな」

集まったスタッフはよく働き、よくしゃべった。彼らに負けず劣らず話好きだと自負するアントニオではあったが、新参者の気後れか、



彼らの中では聞き手にまわることが多い。それでなくても現場統括責任者としての気負いもあるし、何よりもスタッフの中にあつて自分が圧倒的に若いというのも大きかった。

「まあ……今回のプロジェクトも広義ではマイナーチェンジみたいなものですけどね」

「謙遜すんなよ、主任。今回はやりがいがあるってみんな言ってるぜ」「そうですか？」

「だってそうだろう、今回開発するのはジオン系MSの完成形みたいなもんだからな。ハイザックはガンダムタイプとの折衷みたいな、言っちゃえばGMとの混血みたいになっちゃったけど、今回のヤツはかなりいい感じだよ。こんな時代にザク系列のハイエンドが作れるとはね、想像もしていなかった」

「まあ、確かにそうかもしれないですね。いい技術だつてたくさんあるのに、それがジオンの技術つてだけで鼻をつままれる風潮つて、確かにありますね。開発を注文してくるのが連邦軍だから、しようがないといえましょうがないんですけど」

「やつらは何でもかんでも連邦の色で塗り直さなくちや気がすまないんだらうさ……まったくエウーゴ様々だよ。そういうんじやリック・ディアスのチームにいた連中なんて羨ましかつたね。今回のドミンゴがザクの最終形なら、あつちはリックドムの第2世代型だ。やつてみたかつたつてのが正直なところだよ」

終始順調に進んでいた。

機体の外形デザインも決まり、ザクを踏襲して右肩にシールド、左肩にスパイクアーマーを持つ機体が姿をあらわしつつあつた。まだ先のことだというのに皆カラーリングは絶対にグリーンだなどと口角泡をとばし、ドナと同じ秘書課の少紅シヤオホンは、デザイン画を見て「古い中国のサムライみたいで恰好いいわね」と言った。どこがどのよう中国のサムライなのかわからなくて、みんなで笑った。

そんな和気あいあいとしたひとときに水をさしたのは、珍しく人の輪のなかにあつたジャンマリーだった。

「ジオン顔はまずいな」

デザイン画を見ての第一声がそれだった。

「えっ?」

予想していなかった言葉にアントニオたちが戸惑うのにも構わず、ジャンマリーは淡々と続けた。

「アナハイムには旧ジオン系の技術者も相当数が流入しているんだろうが、軍隊となるとこれはそうもいかん。君は、連邦軍という組織の中に、なぜティターンズという特殊部隊が編成されているか了解しているのか? なぜティターンズが地球生まれの連中だけで組織されているかをわかつているかね?」

「いつ、いや、その……」

それはむしろ穏やかな口調だった。しかし獲物を追い詰めるようなあの青い眼で睨まれながら責め立てられては、アントニオは予期せぬ展開にしどろもどろになってしまい、反論の言葉すら見つけられない。部下である皆の前で恥をかかされているようで、何だか屈辱のようなものすら憶えてしまう。

「いいかね、彼らはエリート部隊などではない。ティターンズに与えられた使命は平和維持でもないし、彼らが史上最優秀の軍隊というわけでもない。彼らが帯びている任務はただひとつ——ジオンの残党狩りだ。事実、一部の旧ジオン派が過去に大規模な暴動を起こしたことがあるし、それがティターンズ結成の遠因になっていることも否定できないが、しかし、だからといって旧ジオンというだけで逮捕したり、あるいは殺害したりしていい理由はない。君は30バンチ事件を……いや、その話はいまは関係ないか。とにかくだ。エウーゴでは今後しばらく、ガンダムMkIIがフラッグシップ機となる。それに随伴するのがモノアイのジオン顔では都合が悪いということだ。なぜなら我々はジオン残党ではないのだからな。我々エウーゴには、自分たちこそが正常な連邦組織だという自負がある」

早口にまくしたてると、ジャンマリーはアントニオにデザイン画の挟まったクリップボードを突っ返した。

「デザインを変えろということですか?」

「そんな、いまさらー」

アントニオが何とか食い下がろうとする背後で、誰かが不満を口にした。ジャンマリーは顔色ひとつ変えなかった。ただ前髪の間からまっすぐこちらを見据えている。

「時間もないだろうから、頭部だけでいい。変えてくれ」

そう言うと、そのまま談話室を出ていった。

十数人が集っていたにもかかわらず、談話室は水を打ったような静けさに包まれる。

「何様だよ、あいつ」

誰かが沈黙を破る。

「軍人様ってのは、そんなに偉いもんなのかよ」

「本当だよな。俺たちが泊まり込みでひいひい言ってる間だって、あいつはシミュレーターで遊んだり、そんなことばかりしていやがる」

「誰のおかげでモビルスーツに乗れると思ってんだよ、俺たちのおかげじゃねえか」

「軍隊ではどうかしらねえけど、むこうの事情をここに持ち込んでもらった迷惑だって話だぜ」

和やかだったはずの空気は、一気に険悪な愚痴放題の場になりつつあった。あわててアントニオがなだめに入る。

「まあまあまあ……ここで文句を言っても何にもなりませんよ。こうなったら、ロラン氏が文句の言えなくなるような、最高のMSを完成させることに力を注ぎましょう。技術者らしく、技術者の本分でもって意地を見せつけてやるということです」

「デザインの変更はどうするんだよ、まさかGMの頭でも載つけろっていうのか?」

「その問題はいったん私の方に預けてもらいましょう。さあ、仕事、仕事!」

ぼやきながらもスタッフたちが三々五々散っていくのを見届けると、アントニオも談話室を出た。

そして通路の先を悠然と歩くジャンマリーを走って追いかけた。

「ロランさん!」

アントニオの剣幕にジャンマリーが振り向いた。前髪の向こうから怪訝そうな目つきでこちらを見ている。

「なんだね、課長」

「さっきの話のことで……その外装デザインの話です」

「ああ、それが何か？」

「いえ……ジオン系のデザインではなぜいけないのかと思ひまして」

ジャンマリーがふんと鼻を鳴らした。それがやけに癪に障った。

「それならさつき説明したはずだ。とにかくモノアイはやめてくれ」

「納得いきませんよ」

再び歩き出そうとするジャンマリーを遮るように、アントニオはくると回り込み、彼の眼前に立った。

「まったく納得いきませんね」

「それならもう一度説明しよう。旧ジオンの体質を色濃く引き継いだのは、我々よりもむしろ地球連邦の方で……」

「そうじゃない、どうしてあんたはそういう態度なんだ!? 反地球連邦だなんだって言ってるくせに、まるでテイターズみたいに高圧的な態度じゃないか! ここは会社なんだ! そりゃああんたらみたいに命のやり取りをしているわけじゃあないが、俺たちにとっちゃここが戦場みたいなもんだ! みんな真剣にやってるんだ、それをさもわかったような顔で……そのくせあんたは何もわかつちやいない、あのデザインに込めたみんなの気持ちだつて……」

アントニオの中で今まで押さえつけられていたものが一息に吹きだしてくるようだった。言っても言ってもへそのあたりに際限ない怒りがこみ上げてきた。だがアントニオが口を閉じる前にジャンマリーの手がさつと伸び、まるで聞く耳をもたないというようにアントニオの胸ぐらをつしと掴み上げた。想像していたよりずっと強い力だった。ジャンマリーの背がもう少し高かったなら、彼の足は床から離れていたかもしれなかった。

ジャンマリーはすさまじい形相でアントニオを睨み付けていた。だが不意に冷静さを取り戻し、その手を離した。そこには不完全燃焼を思わせるくすぶりが見てとれた。獵犬という印象は間違っていない

いとアントニオは思った。ひどく訓練のいきとどいた猟犬は、本能にまかせて突つ走ることができないでいるのだ。

「……すいません。言葉がすぎました」

背広の襟をなおしながらアントニオがそう言うと、ジャンマリーはうつむいたまま「いや」と言った。

そして思い切ったように口を開いた。

「私だって旧ジオンの人間なんだ」

アントニオは耳を疑った。だが、冷静に考えれば何も不思議な話ではなかった。ジオン公国というひとつの体制が崩壊したからといって、その国民だった者すべてが消えてなくなるわけではない。

アナハイムにだって沢山の旧ジオン技術者が採用されているし、そうであればエウーゴに旧ジオンの軍人たちがいたって、ひとつもおかしなことはない。

ただ、それなら。

「それなら、どうしてドミンゴのデザインに不満があるんです？うちのスタッフにも旧ジオンは大勢いますけど、むしろ好意的にデザインを受け止めていますよ。ハイザックなんかよりもよほどザクらしいってね」

「正直、私だってそう思っているよ。だが、個人的な好き嫌いでそういうことは決められない。さつきも説明したようにジオンのものはあまり歓迎できない」

「テイターズズのジオン狩り——ですか？」

「そうだ。我々の同志クワトロ・バジーナ大尉はリック・ディアスをドムの再来などと評し、名前まで踏襲した上に、自らの機体がかつての〈赤い彗星〉のように真っ赤に染め上げてはいるがね、そういうことは意図しないプロパガンダととられかねない危険をはらんでいる」

「エウーゴがすなわちジオンの残党組織だと思われるということですか？」

「そういう可能性があるということだ。確かに、私のように旧ジオン出身の人間だってエウーゴには少なくない。だが今はみな新しい理想のために戦っているんだ。これ以上ジオンのものを身にまとう

わけにはいかん。そうこうしているうちに、自分たちがどれだけ違うといったところでジオンの残党というレッテルを貼られ、ティターンズが自らを正当化する口実をあたえてしまう」

「まあ、クライアントがそういう意向であれば、我々は従うしかないわけですけど……でも本当にティターンズってのはジオン狩りなことをするんでしょうか？ そんなの人種差別以外の何ものでもない。ちよつと僕には信じられませんね。何だか、まるで現実味がわかない」

「やつらはそういうことを平気でやるんだよ。しかも自分たちが何をやっているのかも理解せずにやっているし、それにもうやってしまっともいる——君はこんな言いまわしを聞いたことはないか？ 有史以来、世界に戦火の絶えたためしはない」

「わかりますよ。わかりますけど、それが何だかっていうんです？」  
アントニオが怪訝そうな顔でそう返すと、ジャンマリーがまるで説得をこころみるように彼の両肩をがっしと掴んだ。とても強い力だった。

「本当にわかっていいのか!? 君がグラナダで平和に暮らしている今この瞬間にだって、誰かがどこかで戦っている、どこかが戦場になっているんだ。たとえばそれは、君が思っているよりもずっと近くで起こっている出来事かもしれない——君にはその意味が本当にわかっているのか!?!」

## 第五話 「二度目のディナー」

「秘書課の仕事に無関係ってわけじゃないし、ひととおりの目を通しはするけどね、正直いって〈政治〉とか〈世界情勢〉みたいなことって、まるで興味が湧かないわ」

フオークの先でパスタをもてあそびながら、向かいの席に座ったドナがいかにもつまらなさそうにつぶやいた。

アナハイム・エレクトロニクスの制服を脱いだ彼女はとても魅力的だった。夏のおとずれを予感させるように涼し気な色のワンピースをまとい、勤務中はアップにまとめられている栗色の髪を下ろしている。レストランのあたたかな照明に照らされた彼女の髪がさらさらと美しいことに、アントニオはいまさらのように気づかされていた。

二人きりのディナーを楽しむのもこれで二度目になる。一度目はきわめて紳士的であろうと努めた。だから今夜は部屋に誘ってみてもいいかもしれない——よかつたら、ジャンマリー・ロランと同じタイプの高級住宅で酔いをさましていかないか？

「そうだね——正直、僕にも政治だの何だのってのはよくわからない」  
楽しい想像に口のはしをゆるませながら、アントニオは彼女の言葉に同意した。彼女がその気になるような雰囲気づくりをこころがけるなら、機嫌をそこねるような会話の流れに持つていくべきではない。世界情勢について熱く意見をぶつけあったあとで、ロマンティックな夜を過ごす気になる女はいない。

それに、実際のところアントニオにだって政治のことなどさっぱりわからなかった。ジオン公国などという急進的な国家が存在していたのはわずか十数年の期間に過ぎなかったし、彼らによって引き起こされた〈一年戦争〉だって、もはや7年前の出来事になるうとしている。

それ以来、戦争らしい戦争など起こってはいないのだ。数年前に〈デラーズ艦隊〉を名乗るテロリスト集団が、歴史上二例目となるコロニー落としを実行した時にはさすがに肝を冷やしたが、逆説的な言い方をするのであれば、この大規模テロの鎮圧によってジオン残党とい

うものは世界から完全に消滅したのだともいえる。

確かに、先日グリーンノア2で起こった地球連邦軍とエウーゴの武力衝突のような、いわゆる局地戦レベルでの〈小競り合い〉といったものは現在でも起こるし、ニユースで見たり聞いたりする。だが小競り合いはしよせん小競り合いに過ぎないのであって、戦争ではない。つまり、善良な一般市民の生活が脅かされるレベルの戦争など、もはや起こりうるはずはないのだった。

そう考えると、エウーゴという組織はいったい何のために組織されたというのだろう。そうやって対立する図式を描くから武力衝突なんてものを引き起こすのだ。ジャンマリーは違うと言ったが、これではジオンの残党だのと呼ばれたところで言い訳のしようがないのではないか。

いや、そもそもジオンの再起を企てる残党などというものが、本当にまだ存在しているのだろうか。それがエウーゴだというのだろうか。

エウーゴなんていう連中が本当にこの宇宙のどこかに息を潜めているのだろうか。

ニユースは今後の情勢に関していたずらに不安を煽っているが、ふたたび戦争などというものが起こるようなことが本当にありうるのだろうか。

「そうは言うけど、むしろ戦争があった方がいいんじゃないの?」

予想もしていなかった言葉にアントニオはわが耳を疑った。それと悟られないように視線を上げれば、グラスについた口紅を拭いながら、こともなげにドナが続ける。

「自分が何の仕事をしているか御存知? お忘れかもしれないけれど、アナハイム・エレクトロニクスは立派な軍需産業よ。それも戦後の連邦再編で急成長した、グループの筆頭企業じゃない。ここいらで戦争でもないと売り上げが伸び悩むって、重役たちも頭を抱えてるわよ。いくら平和が素晴らしいなんて言っても、エレカを100台売るとMSを1機売るのはじゃ、当然ながらぜんぜん違ってくるものね」

何と答えていいものかわからなかったが、とにかくしゃべらなくて



はならないと思った。ワインを喉に流し込む間だけ時間を稼いだア  
ント二才は必死になって頭を回転させたが、しかし彼女の言葉を否定  
することも肯定することもできなかつた。どちらを選んだとしても  
自分に嘘をついたような気分を味わう羽目になると思ったのだ。

「願わくば、僕たちの作ったMSが戦争を経験することなく引退して  
いってくれたらいいんだけどね」

「あら、ずいぶん平和主義なこと言うのね。そんなこと言っていると給  
料上がらないわよ」

「そんなこと言われても、実感わかないなあ」

隠す素振りもなく、拍子抜けしたかのようにドナがため息をつい  
た。

「思ったほど上昇志向でもないのね、意外だわ。もつとこう、ガツガツ  
してるタイプなのかと思ってた」

「いや、そりゃあ働いてるからには偉くもなりたいし、もつといい暮ら  
しができるようになりたいよ。僕が言いたかったのは、何ていうんだ  
ろうな、戦争なんてまるで遠い異国のことみたいなきがしてさ」

「それで正解なんじゃない？ あたしたちにはまるで関係のない話だ  
わ」

「そうは言っても、僕らのチームにはジャンマリー・ロランという軍人  
がいるじゃないか。彼は僕らのドミンゴを戦場に運んでいく。そし  
てドミンゴに乗って戦うんだ」

「だからそれでいいんじゃない？ MSを設計して売るまでがあたし  
たちの仕事なんだから、買った相手がそれをどう使おうが、そんなの  
あたしたちの知ったことじゃないわ。結局のところ戦争なんて、あた  
したち一般市民には関係のないことじゃないの。それより——」

「えっ、何？」

「それより人を食事に連れだしておいて、もつと楽しい話はできない  
の？ そうね、地球の話……あなたの住んでいた町の話とか、そうい  
うのをしてよ。戦争の話なんかより、よっぽどダイナーに相応しい話  
題だと思わない？」

## 第六話 「Z計画が落とす影」

ドミンゴの原型機、すなわち試作1号機が完成した日、アナハイム・エレクトロニクスで〈Z計画〉がスタートした。エウーゴに参加した若き青年士官によって生み出されたアイデアをもとにした、きたるべき決戦に向けた新型MSを建造するプロジェクトだという。アントニオも詳しい話を聞いたわけではなかったが、それは〈第3世代MS〉と呼ばれる新しいカテゴリーに属するものになるとのことだった。

そして、ドミンゴに関わっていたスタッフは、Z計画のためにごっそりと引き抜かれていった。

アントニオとて抗議しなかったわけではない。だが、しよせんは無駄なことだった。

「戦争の波がすぐそこまで来ているんだよ、カナールス君」

マクローリン設計局長はそう言った。

「出資者でもある我々アナハイム・エレクトロニクスとしては、そう簡単にエウーゴを負けさせるわけにはいかないのだ。だからといって彼らに勝たれてしまっても困るわけなんだが……それはまあいい。私が言いたいのは、ドミンゴのような汎用機も重要だが、より高性能な機体も必要とされているということだ。たとえば新聞の一面を飾るような、スペシャルと呼ぶに値するフラッグシップ機だよ。エウーゴがそういうものが欲しいと言ってきているんだ、袖にはできん。幸い、君のところのプロジェクトは大詰めで、ほとんど終了したも同然なんだろう？ あとは予定どおりテストをこなしながら、別ラインで増加試作機（事実上の第一次量産機）が建造されるのを待ちたまえ」

一気に暇になった。

脱力感に肩を落としながら談話室に行ってみると、わずかな人数に減少してしまったスタッフとドナ、それにジャンマリーの姿があった。

「カナールス課長、遅かったじゃないですか」

プライベートではファーストネームで呼ばれる権利を手に入れていたアントニオだったが、職場だとそういうわけにはいかない。彼は

作り笑いを浮かべながらドナのほうへ向きなおった。

「ガルシア君か。どうした、何かあったかな？」

「何かって……このありさまは一体どうしちゃったんです？ スタッフも五分の一に減ってしまっ……」

胸の前で両手を合わせて、まるでお祈りでもするようにアントニオに迫る。

「これからテスト期間に入るわけだからね、機体をバックアップするだけの人数がいれば大丈夫だから……他にも進行中のプロジェクトが山ほどあるわけだし、手の空いている者を遊ばせておく余裕なんかないってことだよ。今日はいよいよドミンゴのエンジンに火が入るんだ、僕たちだってこんなところで油を売ってなんかいられないぞ」  
もはや20人ほどになってしまったスタッフがざわざわと揺らめいた。やがてその中からひとり、またひとりと思うところを口にしはじめる。

「もしかして、Z計画ってやつのはせいですか？」

「ガンダムを作る計画だっていうのは本当なんですか!？」

思わずアントニオは顔を上げた。

「ガンダムだって?」

「新型のガンダムを作るんだってもつぱらの噂ですよ。変形機構を備えた、第3世代のガンダム」

自然、皆の視線がジャンマリーに集まった。それまで部屋の隅で壁に身を預け、黙って話を聞いていた彼は、自分が注目を浴びているのに気づくとばつが悪そうに組んでいた足をほどいた。

「いや、私も聞いてはいたが」

言葉を探すように足元を見つめながらそう言った。

「話には聞いていたが……こんなに早く動き出すとは、正直私も意外に思っているところだ。アナハイムでやっているんだから、いずれ皆も知るところとなるんだろうが、噂のとおりZ計画とは新型ガンダムを作るプロジェクトだ。その……ニュータイプという触れ込みでエウーゴに参加した青年士官がいるんだが、彼が搭乗したガンダムMkⅡの稼働データなどをもとにして、エウーゴの象徴たるMSを作る

うということになったんだそうだ。しかし……こんなに急ピッチで製作に入るといふことは、まさか降下作戦に間に合わせようという腹づもりなのか、いやさすがにそれは……」

「降下作戦!」

周囲の皆がいつせいに色めきたった。

「ああ、いや……その……エウーゴでも色々と作戦を考えているということだ。だからカナレス課長の言うとおり、我々もドミンゴのテストを進めて、一日でも早く正規の量産ラインに乗せねばならない。こうしている間にも戦局は刻一刻と変化しているだろうからな」

ジャンマリーが戦局という言葉を使ったのを聞いて、アントニオは自分がひどく動揺するのを感じた。

ここに集っている人々、それらが手がけた仕事の成果は、否応もなく戦場へとつながっている。そういう〈現実〉が急速に説得力を増したように思われた。鳥肌がたった。

皆が落胆しているのも感じられた。

同じ社内で新型のガンダムを作るといふプロジェクトが進行している。そして一緒に仕事をしていた仲間たちがそこに引き抜かれていったといふことは、では我々はプロジェクト・ドミンゴのために選抜されたメンバーではなく、むしろ取り残されたメンバーなのではないか……?」

物がガンダムであるというのなら、ドミンゴがザク系の完成形になるだろうとか、リックディアスがドムのアップデートであるとか、もはやそういう次元の話ではなくなってくる。それはその時代のMSをひと括りにした上での、究極のMSを設計するということに他ならないのだ。

旧ジオンの出身だろうが、そうでなかろうが、そんな話を聞いて嫉妬を抱かない方がどうかしている。そしてここにいるスタッフはZ計画の始動にあたって、お呼びのかからなかった連中なのだ……。

「何言ってるのよー!」

水を打ったような沈黙の中、水面を蹴散らすようにドナが大きな声で言った。

「ガンダムがスペシャルな機体の代名詞だなんてことは、そりゃあ知ってるけれど、しよせんワンメイクの実験機じゃない。お金ばっかり湯水のように使いこんで、いざ量産してみたらGMⅡみたいにスペックダウンしちゃってたなんてのがオチってものだわ——よく考えてみてよ、ガンダムみたいに高くつくおもちゃより、あたしたちのドミンゴの方がずっと会社に貢献できるはずだって思わない？ 高性能で、値段もハイザックよりちょっと高いくらい。いくらガンダムだって言ったって、たった1機の高級実験機じゃそもそもベストセラーになりようがないわよ」

予想外にドナが演説をぶちあげたので皆面食らったが、黙って聞いているうちに顔をほころばすもの、頬に赤味の差す者があらわれはじめた。やがて口々に励まし合う。

「まあ……そりゃそうだよな、俺たちやザクのハイエンドを作ってるだもんな」

「まったくだ、大量生産機のどこが悪いって話だよ」

「ああ、どれだけ高性能のガンダムだって、ドミンゴ10機とは渡りあえねえよな。これこそ量産機の強みってもんだぜ」

「ケチくさいこと言うなよ、1対1だって負けやしねえさ。量産機と違って実験機ってのは、とかく信頼性が低いと相場が決まってる」

沈みゆく船と運命をともにするような顔だちだった皆が、どんとんと活気づいていった。ドナの豪放磊落っぷりに唾然となっていたアントニオも、口許に笑みがこみあげてくるのを止められない。

「よおしー ドミンゴのテストを開始するぞ、目にももの見せてやろうじゃないか！」

声を張り上げて、アントニオは号令を発した。

## 第七話「火の玉」

格納庫のハンガーにおさまったドミンゴ試作1号機は、すでにエンジンやジェネレーターを始動させ、主がやってくるのを待ち受けていた。アナハイムのロゴが入ったパイロットスーツに着替えたジャンマリーが、感慨深そうにその威容を見上げている。

「緑色じゃないんだな」

まるでからかうようにそんなことを言った。アントニオは少々むっとしたが、もしかすると今のは彼なりの冗談だったのかもしれないとも思った。真意を確かめるように彼の方を振り向けば、ジャンマリーはすでにヘルメットを被り、バイザーを下ろしたところだった。第1回目の試験メニューを記したクリップボードを渡すと、ジャンマリーはそのまま真つ直ぐ歩を進め、クレインのステップに足をかけるや一気にコックピットの高さまで運ばれていった。

エアロック解放の警報ブザーが鳴り響き、黄色と黒の警戒帯を巻いた作業用エレカに乗ったスタッフがアントニオを拾っていった。エレカの後部座席からうかがうと、ガンダムタイプの顔に改装されたドミンゴの双眼に光が灯ったところだった。スタッフたちが歓声を上げるのが聞こえる。

ジャンマリーが言ったとおり、結局ドミンゴのボディが緑色に塗られることはなかった。モノアイがジオンMSの最たる特徴であるように、緑色がザクを連想させる色であったからだ。結局、塗装は宇宙空間での迷彩効果を期待したといわれるリックディアスの紺色に準じ、非常時における視認性確保のため部分的に赤で塗り分けられた。

しかしついこの間、第二次量産以降のリックディアスすべてが赤色に塗られることになったと聞いた。迷彩も政治的な配慮もあったものではないとアントニオは思った。軍人というものが何を配慮して物事を決定しているのか、こうなってはアントニオには皆目見当がつけられないのだった。

頭部デザインもいわゆるジオン顔から一新された。ジオンを連想させるものが好ましくないというジャンマリーの苦言を受け、スタッ

フたちが悪のりの果てにガンダムタイプに似せてこしらえた代物である。

今やそのへ顔だけガンダム型の機体がグラナダ上空、アナハイムテスト宙域を縦横無尽に駆けめぐっていた。第1回目の試験メニューは基本運動性能と加速性能のチェックである。

管制室から様子を眺めていたアントニオは、ドミンゴの完成度が上々であることを確信しつつあった。加速性はまったく申し分のないものだった。月が発散する重力などものともしないように上昇したドミンゴは、試算されていた数字を上回る加速度で目標高度まで到達してみせるのだった。

「今のところ機体に異常はありませんか？ では次はこのコースで……いまデータを送信します。よろしいですか？ ではこのコースを飛行して下さい。設定速度は……」

人員不足のせいでオペレータをやる羽目になったドナが、インカムに向かって次々と指示を発していった。それに応えるようにジャンマリーの駆るドミンゴが、ほとんどすべてのメニューにおいて試算を上回る数値を叩き出してくる。

最後のメニューの様子を見届けて、前屈みになっていたアントニオはようやく安堵のため息とともに、椅子の背もたれに身を預けるに至った。

何も問題はなかった。まだまだテストしなくてはならない項目は多岐にわたるが、この幸先のよさを見た現在では、問題が起ころうことなど夢にも想像したくはなかった。

「ありがとう。みんな、この短期間によくやってくれた」

立ち上がるとアントニオは皆の方に向き直って心からの謝辞を述べた。皆も満足そうに微笑みをよこし、今となってはそう多くないスタッフの一人々とアントニオは握手を交わしてまわった。

それを済ませると、今度はアントニオ自身がインカムを装着し、通信回線を開いた。

「こちらカナーレス。ジャンマリー・ロラン、聞こえますか？」

『通信はクリアだ』

あいかわらずぶつきらぼうな調子でジャンマリーが返してくる。

「本日のテストはこれで終了です。帰投してください」

『終了だと？ 私もマシンも、まだまだやれそうだが？』

「民間の規定により、長時間におよぶMS連続搭乗は禁じられていますから、仕方がないんですよ。それに機体の点検や整備の時間も必要になってきますからね」

『なるほど了解した。これより帰投する』

インカムを放り出すと、アントニオは大きく伸びをした。ここまでの流れが平坦なものばかりではなかったにせよ、それでも彼らの築いた船は出港を果たしたのだった。

この後どんな航海が待ち受けているのかは神ならぬ身には予想もつかぬことではあったが、それでも彼らの目に海は、今では穏やかさをたたえたものとして映っていた。

「ドミンゴの出来映えは、ひとまず上々と言ってかまわないだろう。無事、期日通りにテストに入ることができたのも、皆ががんばってくれたおかげだ。しばらく家に帰っていなかつた者も今日からは自分のベッドで寝られるぞ。しかし時間もまだ早いし、寝る前にちよつとした祝賀会を開いても罰はあたらないと私は思うのだけれど、皆はどうかな？ 勤務明けに私のおごりでビールを飲むくらい、ささやかなものだろうか？」

皆の間からいつせいに歓声があがり、文字通り飛び跳ねて喜ぶ者も中には何人かあった。その輪に加わりながら相好を崩していると、不意に背後から張りつめた声が飛んだ。

「カナールス課長！」

声を発したのはドナだった。せっかくの祝賀ムードに水を差されてアントニオは怪訝そうな顔をしたが、すぐにオペレーター席まで行って、彼女が表情をこわばらせる理由を確かめた。

彼女が指さすディスプレイを見て、アントニオは我が目を疑った。

そこには移動を続けるドミンゴが発するビーコン信号の光点があった。つまりドミンゴがグラナダ上空のどの座標に存在しているのか、その現在地を表示するディスプレイである。



その中で移動を続けるドミンゴはこちらに向かってきてはいなかった。それどころか正反対を向いて、まるで月重力圏を脱出しようとしてもするかのよう上昇につぐ上昇を繰り返していたのである。ドミンゴの移動速度を示すカウンターの数字がどんどん高まっていくのを見て、やつとのことでアントニオは事態を把握した。

「一体何をしようっていうんだ!」

忌々しげに言うと、いま一度インカムを取り上げ、耳に当てた。

「ジャンマリー・ロラン! 一体何のつもりです!? いますぐ帰投して下さい!!」

返信を待った。途端にガリガリと耳障りなノイズが耳に飛び込んできた。その向こうに微かにジャンマリーの声が聞こえる。

『……………あそこを……………っている、あれは私の……………すぐ……………』

「なんだこれは……………ミノフスキー粒子が干渉しているだど?」

「課長、ミノフスキー粒子濃度が上昇しています……………准尉の身に何か異常があったのでは?」

アントニオの言葉に答えるように叫んだドナが、緊張した面持ちで通信ディスプレイを示していた。画面の隅ではミノフスキー濃度を示す数値が踊り、通信困難を示す警告メッセージが表示されている。

明らかに異常事態だった。こちらではあずかりしれないが、ジャンマリーは間違いなく何らかの異常に見舞われたのだ。途切れ途切れに聞こえた彼の声は、普段とは違ってずいぶん興奮した口調だった。

しかしなぜこんな場所で、それも先程までは平常値の範囲内だったミノフスキー濃度が急速に上昇したのか。

「おい、あれのせいなんじゃねえか!」

スタッフのひとりが不意に声を上げた。みれば管制室の隅にもうけられたガラス窓に数人がひしめきあい、何事が騒いでいる。何に色めき立っているのか合点のいかないまま、ひよいと首を伸ばして窓の向こうを覗き見ると、はるか遠く、地球をかすめるあたりに明滅する光点が見えた。

「すげえ……………あれって艦隊戦なのかな!」

「そうなんじゃねえか? おっ……………また光った」

「見えねえなあ。どつちがどつちなんだろうなあ」

「いいじゃねえか。どのみちニューズでやるだろ、これ」

スタッフたちのそんな言葉を聞いて、アントニオはあれが戦闘の光であることを理解した。それは長いことスペインで暮らしてきた彼が初めて目にする光だった。あそこで……月のすぐ向こう、おそらく地球の衛星軌道上と思しき場所で、艦隊による戦闘が行われているのである。スタッフは遠くてよく見えないなどとぼやいているが、アントニオはこれでも近すぎるくらいだと思った。

「まさか、ジャンマリー・ロランはあそこに向かっているというのか……？」

再びインカムを耳に押しあてると、アントニオは声を限りに張り上げた。

「ジャンマリー！ロラン、帰投せよ！ その機体に武装は施されていない、帰投して下さい!!」

何度かそんなことを繰り返したが、聞こえてくるのはほとんどがノイズだった。かすかにジャンマリーのものらしき音声の破片が浮き上がってきたが、何万光年の隔たりがあるがごとく、まったく聞き取ることができない。

そうこうしている間にもビーコンの光がディスプレイ上を移動していた。このままでは本当に月を飛び出してしまいかねない勢いである。

「ガルシア君、緊急停止だ！ こちらからでもある程度の操作はできるはずだな!? 急いでやってくれ!!」

「でも、このミノフスキー濃度では……」

「いいからやるんだ!!」

アントニオの剣幕に押されて、弾かれるようにドナはキーボードを叩き始めた。ディスプレイにメニューがあらわれ、次々と画面が入れ替わっていく。

「駄目です……やっぱこの濃度ではこちらの信号は届きません」

「通信だってまだ完全に途切れちゃいない、信号が届くまでやるんだ!!」

そうは言っても、通信などほとんど途切れたも同然の状態であった。だからといってアントニオには他に何か具体的な手だても浮かびそうにない。

再びドナがディスプレイに視線を落とし作業を続けた。彼女の背後からビーコンの移動を見守っていたアントニオは、息をつぐのも忘れたほどだった。ほどなく画面に「送信成功」のメッセージがあらわれ、彼の目にビーコンの移動が急速に衰えていくのが確認できるようになった。

「成功したみたい……です」

「ありがとう、よくやってくれた」

「こちらの信号を受信して、機体の稼働は完全に停止しました……しかしまだ慣性がはたらいています。マニュアルで制動をかけはしましたが、機体は微速移動を続けています」

汗ばんだ手をハンカチで拭いながら、ドナがビーコンを指さした。「回収のMSを出してもらえないか……こんなこと、できれば上には知られたくないがね」

そう答えて内線電話の方に移動したアントニオの耳に、再び窓際から上がった歓声が聞こえてきた。

「見たかよ、今のでかい火の玉！　ありやあ戦艦が沈んだ光に違いないぜー！」

## 第八話 「表層と深層」

非武装仕様の2機のGMⅡによって、完全に沈黙したドミンゴが回収された。ノーマルスーツを着込んだアントニオは格納庫内でその様子を見守っていた。ジャンマリーが降りてきたら今度こそ毅然と言ってやらなくてはならない。頭の中でそのためという言葉を探しながら作業の様子を眺めていると、機体が完全に固定されるより早く、ドミンゴのコックピットハッチが解放された。機体の係留作業を進める作業員が戸惑う中、ジャンマリーはハッチの縁を蹴ってクレーンの足場に飛び移ると、そのまま地上に降下してきた。

地上に降り立ったジャンマリーは不機嫌そうな足取りでエアロツクに入ったが、扉の閉まる寸前にアントニオがそこに飛び込んできたのを見て、バイザー越しに威圧的な視線を向けてきた。

しばらくは無言のままだった。だがそれは空気がなければ音声は伝わらないからであって、別にアントニオが何らかの気遣いをしたからではない。エアロツク内に空気が充満し、青ランプが点滅すると、アントニオは急いでヘルメットを脱ぎ、立ち去ろうとするジャンマリーの腕をつかんだ。

「行かせませんよ、ジャンマリー・ロラン。いったい一体何のつもりであんな行動に出たというんです、あなたには納得のいく説明をするだけの責任があるはずだ」

ジャンマリーは答えなかった。そのかわり、かつて見せたのと同じく凄まじい形相でアントニオを睨み返した。しかし、やはりあの時と同じように冷静さを取り戻し、アントニオの腕を払いのけながら言った。

「私だつてまだ混乱している……ともかく来たまえ。説明はニユースが代わりにしてくれるだろう」

\* \* \*

「散らかっていますけど、まあ入ってください」

アントニオは管理職用の個人オフィスにジャンマリーを招き入れると、請われるままに自分用の情報端末をネットワークに接続し、

ニュース番組のメニューを開いた。

「これだ」

ディスプレイに並ぶ最新ニュース項目の中のひとつを、脇から覗き込んでいたジャンマリーが指さした。そこには「地球衛星軌道で戦闘勃発、エウーゴに甚大な損害」の文字列があった。そこから詳細をダウンロードすると、ニュースを読み上げるアナウンサーのVTRが画面上に再生された。

アナウンサーが淡々としゃべりはじめた。

「——地球標準時でおよそ18時前後に、地球衛星軌道上において地球連邦宇宙軍と反地球連邦政府エウーゴによる戦闘がありました。連邦軍広報部による発表ではこれを、何らかの目的で軌道上の通信衛星を破壊しようとしたエウーゴ艦隊に対し、連邦宇宙軍が迎撃を実施したものとしています。この戦闘は両陣営とも複数の宇宙艦を運用して行われ、ここ数日頻発している両陣営の戦闘の中でも最も大規模なものとなりました。なおこの戦闘においてエウーゴは巡洋艦一隻を失っており、今後の動向が注目されるどころだといえそうです。また通信衛星の破壊によって現在地球・宇宙間の通信が一部の端末ではできなくなっている可能性があります……」

それからしばらく些末なことをしゃべり、VTRは終わった。

「やはり沈んだのか……では、あの光がそうだったのだな」

落ち着いた口調でジャンマリーがつぶやいた。だが、どれほどのショックがあったものか、動揺は収まっていならしい。微かに語尾が震えている。

「なんだっていうんです?」

あれだけ勝手なことをしておいて、なおも冷静な口調を維持しようとするジャンマリーの態度に、さすがのアントニオも苛立ちを覚えた。しかし苛立ちにまかせて彼のほうを振り返ると、意外なことにジャンマリーという男はわなわなと震えていたのである。

「いまのニュースが何だっていうんです? 何の目的があつてのことかは知りませんが、目論見どおりエウーゴの艦隊が通信衛星を破壊したっていうじゃないですか。作戦成功なんでしょう、准尉にはむしろ

吉報なんじゃないですか!？」

ジャンマリーは明らかに萎えてしまっていた。責めるのなら今のうちに責めておけといわんばかりに、アントニオはことさら強い口調で言っただけだ。

「何のために社員証を発行していると思っただけですか!? 今のあなたはエウーゴの構成員であって、その実、構成員ではないということをお忘れなく。今のあなたはアナハイムにやってきた出向社員扱いなんですからね。そうであれば、ひとまず戦場のことは頭の隅に追いやっておいてもらわないと、こちらにも我慢の限界があるというものですよ!」

珍しくジャンマリーは言われるままだった。両の拳を握りしめて屈辱に耐えているようだった。肩がぶるぶると震えている。

その様子をひとしきり眺めているうちに、アントニオは自分が悪役を演じているかのような居心地の悪さも感じ始めた。それでいくぶん語気を和らげて、諭すように言った。

「何か釈明することはありますか。別の部署のMSに回収をお願いしてしまいましたからね、私の方でも始末書という厄介なものを書かなくてはならないのです」

すかさずジャンマリーは何かを言おうとしたが、うまい言葉が見つからずに逡巡しているようだった。それでもしばらくの沈黙の後に、途切れ途切れに話を始めた。

「ニユースで、巡洋艦が一隻沈められたと言っていただろう」

「そういえば、そんなことも言っていましたか」

相槌を打ちながら、アントニオはさてニユースではそんなことを言っていたらどうかと数分前の記憶を思い起こしてみた。彼は通信衛星が攻撃されたのを聞いて、いま使っている端末はこのとおり支障ないとしても、自宅に置いてあるもうひとつの端末は大丈夫だろうか、もし駄目だとして復旧にはやはり時間がかかるのだろうかとか、そんなことを考えていたのである。

「撃沈された船は〈ヘモンブラン〉という巡洋艦だ」

「ニユースでは、艦の名前までは伝えていなかったようですが……」

「ドミンゴのカメラで拾った映像を何倍にも拡大して確認したよ。あれはモンブランに間違いない。そもそもエウーゴはまだそれほど多くの艦艇を所有しちやいないだから、間違えたくても間違えようがない……間違えたくてもね」

「どうにもわかりませんね。つまり、どういうことです」

「モンブランは、私が乗り組んでいた船だったんだ……つまり私はあの船からやってきた」

「それは……」

思わぬ言葉を聞いて、アントニオは二の句が継げなくなった。無意識に右手を口許にもっていくと、彼はもてる想像力を総動員して考えをめぐらせた。

母艦を失ったということは、すなわち帰るべき場所を失ってしまったということであるのにはかならない。無論、巡洋艦が一隻沈んだところでエウーゴという組織が即座に瓦解して消え去るとは思えないが、それでもジャンマリーが撃沈されたモンブランという船に乗り組んでいたというのなら、そこには親しい同僚や、もしかしたら恋人といったものが同乗していたのかもしれないし、私室には思い入れのある品のひとつくらい置いてあったかもしれない。

たとえるなら表に用事を足しに出ている間に、この工場がドナもろとも吹き飛んだようなものだろうか。もし現実にそんなことが起こったら、自分なら一体どのような行動に出るのだろうか？

脳裏にディスプレイ上を移動していくビーコンの光が浮かんできた。画面の隅で急速に上昇していくドミンゴの速度といったものをアントニオは思い出していた。

あれは明確な欲求のあれわれだったのだと彼は思った。試作型のドミンゴが非武装であることも忘れ、ひたすら戦闘宙域を目指そうとしたジャンマリーは、自分の艦が沈むのをどうにかして防ぎたかったのだ。

見たかよ、今のでかい火の玉！　　ありやあ戦艦が沈んだ光に違いないぜ！

誰かが叫んだあの言葉が、耳の奥でねばつくように再生された。そ

れは不謹慎なもの言いだった。

あの火の玉が炸裂した瞬間にジャンマリーの仲間たちが一斉に散ったのである。それがたとえあずかり知らぬことであつたとしても、不謹慎であることに変わりはない。

しかし、アントニオがあゝの瞬間とくべつ何を思うこともなかったのも、また事実なのだった。それが目と鼻の先で起こつていたことであるというのに、それでも彼はまるで異国の出来事でも見るように、あるいはスクリーンに映された映画でも観ているかのように、何事もなくそこを通り過ぎていったのである。

あゝのとき彼の心の大半を占めていた感情はジャンマリーに対する憤りだったし、残つたわずかな部分では始末書を書く羽目になりそうな状況に舌打ちしていたのだ。

「准尉、僕は……」

目に映るものが、少しずつ姿を変えていく気がしてならなかった。足元をすくわれるように、何か急速な変化が訪れる気配があつた。そしてそれは間違いなく自分の中から発生しているのだと、アントニオは気づき初めている。

「僕は、この宇宙で戦争をやっているなんてことが、今の今まで信じられずにいたんですが……信じられないというか、まるで実感が湧かずにいた」

「それは……それは君たちが見ようとしていないからだ」

「そうなんでしょうね。実は僕のいた管制室からも、モンブランという船が撃沈された時のものであろう光が見えたんですよ。それでも僕はまるで現実味が感じられなかったんです……今、少しずつ実感が湧いてきているところです。あなたという人が目の前にいて、撃沈されたあの船から来たんだっていうじゃないですか。戦争なんて僕にはまるで関係のない、別世界の出来事のように思つていたのに、本当はそうじゃなかった。何て言えばいいのか、どうやら僕たちが楽しくやっていたこの場所は、戦争をしている宇宙に地続きになつていらいしい」

慎重に言葉を探しながらアントニオはやつこのことでそう言った。



それを聞きながら、ジャンマリーは幾分か平静を取り戻したように見えた。

「確かにグラナダは平和だな。正直に言えば、最初君たちに会った時、あまりにも平和そうにやっているものだから、少々拍子抜けしたし、いくらか腹もたつた」

そう言つてジャンマリーは笑つた。思えばジャンマリーが笑つたのを見たのは、これが初めてのことであつたかもしれない。

「宇宙で本格的に戦争が始まりそうだつていうこの時に、どうしてこんなに平和そうにしているのかと思つたよ。この連中はニュースを見ていないのか、あるいは見えていても危機感を抱かないのかとね。いまだから白状するが、君も相当平和馴れして見えたものだ。せいぜい距離を置こうと思つたよ」

「そう言われると、今となつては反論の余地もないですが……それでも不思議に思うんですよ。戦争なんて誰だつて嫌でしょうに、どうしてこんな風になるんです？　そもそもエウーゴという組織が連邦に喧嘩を売らなければ、戦争が起こるかもしれないという不安定な情勢にもならなかつたはずですよ。准尉はテイターズがジオン狩りの横暴を働いているなんて言いますが、本当にそんな事実があるとおっしゃるんですか？　ジオン残党なんていうものがいまだに存在していて、再起の機会を狙っているなんて、そんなのまるで映画か何かじゃないですか。そんなことのためにどうして戦争なんかしなくちやならないんです!?　そのために准尉の船が沈んだつていわれても、何のために沈んだんだか、僕にはちつとも理解できませんよ……」

手近にあつた椅子を引き寄せると、ジャンマリーはどつかと腰を下ろした。まるでこれから長丁場になるとでもいいたげな態度だつた。「君はなかなか腹のたつことばかり言うな。だがまあ、今となつては君の言うこともわからないでもない。戦場から来た私が予想以上に平和な街並みを目の当たりにしてショックを受けたように、そこで暮らしている君は戦争というものに違和感を覚えているわけだ。それがすぐ近くで行われているにもかかわらずな」

「多分、そういうことなんだと思いますよ」

「ふむ……よかろう。君にエウーゴが直接的な行動をとるきつかけとなった、その真相を教えてやろうじゃないか。我々に戦う決意をさせた出来事だ」

言った後もジャンマリーはしばらく迷っているようだったが、その間じゆう組んだままだった両腕をほどくと、その手でディスプレイを指して言った。

「どこのニュースチャンネルでも……アングラ系のチャンネルの方がいいかもしれないが、そこにアクセスして過去のニュースアーカイブを検索してみるんだ。おそらく〈30バンチ〉で検索すれば一発で見つかるだろう……ほら、これだ」

そこには、つい2年前のことだというのにアントニオが聞いたこともないニュースの詳細がまとめられていた。

彼は決して社会情勢に明るい方ではなかったが、聞いたこともないというのは、これは何も彼の不勉強によるせいではなかった。おそらく世界中のほとんどの人間が知らない出来事である。

## 第九話 「決定的なスイッチ」

始末書を書くのは何とも憂鬱なものだったが、どうにか書いて提出してしまえば、いくらか気が楽になった。

最初は「突如機体がコントロールを失い云々」という内容でお茶を濁そうとしたが、これだとまるでドミンゴの構造そのものに欠陥があるような文面になってしまい、テスト中止の上に全面検査といった憂き目をみないとも限らなかったので、まったく削除してしまった。

そうかといってジャンマリーの暴走が原因だと書いてしまうのも気が引けた。順序を追って事情を聞いていけば、頭ごなしに暴走だと決めつけられないような理由をそこに見いだしてしまつたからである。

だが、馬鹿正直にそんなことを書くわけにもいかない。

結局、管制側が誤つたデータを送信したことで機体が危険な状態におちいり、やむなく緊急停止させることになつたため、大事をとって回収MSの出勤を要請した……といった内容に落ち着けた。オペレーター席に座っていたドナに泥を被つてもらふ恰好になるが、知らない仲でもないのだし、許してもらふことにした。もちろん、最終的な責任は送信データのチェックを怠つた自分にあるという一文を添えることを忘れなかつた。

正直丸く収まつたと思つた。

「信じられないわ、勝手にそんなことするなんて！」

もはや常連といつてもよいレストランの席で、ドナは怒りをあらわにして隠そうともしなかつた。ここまで怒ることはないだろうと思つていたアントニオは、周囲の視線を集めてしまうに十二分なドナの怒声に気圧される一方であつた。ただ両手を広げてなだめすかすばかりである。

「ごめん……そんなに怒るとは思つていなかったから。でも、あくまで僕の始末書であつて、君に何かペナルティが課せられたり、呼び出されたりするようなことはないから、そこは安心してもらつていいよ」

「そんなの当たり前でしょ。あたしが怒ってるのはそんなことじゃないのよ」

そう言ってドナはグラスのワインをぐいと飲み干した。すかさず給仕が歩み寄ってきて、彼女のグラスを再び情熱色の液体で満たしていった。去り際にちらりと二人の顔を一瞥していく。痴話喧嘩か何かだと勘ぐられてしまったのだろうか。もとより釈明する気はなかったし、考えてみれば似たようなものかもしれないとアントニオは思った。なんだかひどく場違いな席に座っているような気がする。

「あたしが怒ってるのは、なんであたしがジャンマリー・ロランのためにそんな目に遭わなきゃならないのかってことよ。あれは完全に彼が悪いじゃない。どうしてそんなに優しくしてあげるのか、本当、理解に苦しむわよ。こないだまで何だかんだって彼の悪口ばかり言っていたくせに」

「うーん……まあ、それはそうなんだけど」

「あなたはそれほどでもないのかもしれないけど、あたし、あの人だいつきらいよ」

「それは何となくわかってはいたけどさ、でも今回の始末書のことといえば、誰も彼もおとがめなしってことに落ち着いたんだから、それでいいじゃないか」

「よくないわよー」

二人の間に飾られた燭台の炎が、ドナの語気にあおられるようにゆらゆらと揺れた。その炎は彼女の剣幕にたじろぐアントニオのようでもあったし、その輝きは、ちっとも似ていないくせになぜかモンブランの断末魔の光を思い出させるのだった。

いざ付き合ってみれば、このドナという娘はスペイン人よりはむしろスペースノイドであると自称しておきながら、そのくせ生粋のスパニッシュであるアントニオよりも、はるかにエネルギーシユなものを内に秘め、その身にまとうているのである。

勝手に始末書に登場願った罪滅ぼしに、彼女が飲みたがっていた値の張るワインを出してもらったものの、その程度のことと彼女の内に轟々となつた炎は鎮められないのかもしれない。彼女が〈Z計画〉を

こきおろしてからというものの、アントニオは文字通り彼女に一目置いてる。

「今後は気をつけるよ、だから機嫌なおしてくれないか……そうだ、もっと別の話をしようよ」

そう言うのと、ドナもため息をついて、肩の力をいくぶん抜いた。

「あたしだってそれほど怒っているわけじゃないわ。ちよつとびつくりしたっていうか……言いたいことはわかってくれたみたいだし、過ぎてしまったことだもの、許してあげないこともないわ。それよりも、そうね、明日は久しぶりに二人そろって休みになったんだし、今日のところは楽しく食事をした方がいいわね」

「そうは言ってみたものの、ずつと忙しかったから話題もないね」

アントニオがため息まじりにぼやくと、ドナが微笑んだ。

「そうね。毎日職場で顔を合わせてるんだから仕事の話をしたってしようがないし、ドミONGOにかかりつきりだったから部屋に帰っても寝るだけだったし。ああ、でもそういえば……」

「うん？」

「やつとのもので評価試験に入って余裕ができたっていうのに、こないだは随分遅くまで残ってたみたいじゃない？ 何か気になることでもあったの？」

「ああ、あれは別に仕事とは関係ないんだけど……」

興味が湧いた。このことを話したらドナはどんな顔をして、どんな感想を抱くだろうか。

しかしそれを問うことには、何か決定的なもののスイッチを押してしまうような、そんな予感があった。それを押した途端、何もかもが動き出してしまって、戻そうと思っても絶対に戻すことができなくなる、そんなスイッチだ。

だが興味が勝ってしまった。あるいはやつと和やかになりつつあった会話の流れを止めるのを、無意識に恐れたのかもしれない。

どのみちそれはアントニオの言葉だった。口の端から音が漏れだして、ドナの前に言葉となって並んでいった。

「30バンチ事件っていうの、知ってるかな。それを調べてたんだ」  
少しドナの顔に陰りが差した。この話題にはあまり興味がないと  
でも言いたげな色が、形のいいアーモンド型の眼の端に沸き上がって  
くる。

「そんな事件知らないけど……なあに、また難しい話？」

「別に難しいってわけじゃないんだけど」

どこか責めるような彼女の言葉をかわしながら、アントニオもグラ  
スのワインを口に含んだ。

乾いた喉の奥を目がけて流れていった液体がやがて血液に溶け出  
すのを待つように、彼はしばしばうつぶいて黙っていた。そして、話し  
始めた以上途中でやめられないとばかりに、彼女に30バンチ事件の  
あらましを語り始めた。

それはジャンマリーが何度も口にしたジオン狩りの典型的な例で  
あり、また最大規模の事件でもあった。

かつての大戦終結後しばらくして、再び宇宙移民が自治権をうった  
え始め、その運動が次第に拡大していった時期があった。それらの運  
動は徐々に組織だったものになり、様々な市民運動を巻き起こすまで  
に成長していった。

そして30バンチ事件が起こったのである。

30バンチとは、スペースコロニー群島へサイド1の30番地コロ  
ニーのことである。いまから2年前の0085年、ここがかつて類  
例が見当たらないほど大規模な決起集会が行われたのだ。集会の主  
旨は無論、宇宙移民の独立自治権の主張であり、中央集権的な地球連  
邦政府一局統治からの脱却を提唱したものであった。

地球生まれ、地球育ちのアントニオから見ても、それは理解できな  
くはない話であった。スペースコロニーの維持が地球や月との関係  
なしには困難であるのは明白だったが、それでもかなりの完成度で  
様々な要素を両立させるコロニーも出現しつつあったし、何よりも全  
コロニーの人口をあわせるなら宇宙移民の人口は地球人口に拮抗し、  
近い将来それを上回るであろうことがかなり現実味を帯びてきてい  
たのである。

しかし宇宙移民たちが希求し、30番地コロニーで熱狂の頂点を見たこの運動は、ジャンマリーが指摘したように致命的な危険をはらんでいたのである。

それはまさに致命的だった。宇宙移民族による独立自治圏の樹立。それはかつてジオン公国が提唱し、世界を巻き込む大戦争を引き起こした件の主張と酷似していたのである。たったひとつだけ、しかし大きく違っていたことは、30番地に集った人々が武装していなかったという、その一点のみだ。その時点で、少なくとも彼らには戦う意思がなかった。

地球連邦政府はこの事態を深刻なものと受け止めていなかったという説もある。しかし30バンチ事件をさかのぼること数年前の〈デラーズ紛争〉以降、急速に発言力を増してきたティターンズが母体組織である地球連邦軍すら押さえつけ、きわめて実際的な行動に出た。市民運動の鎮圧に警察隊ではなく軍隊が、それも世間ではエリート部隊と喧伝されているティターンズが出向いていったのだ。

だが彼らは戦闘行為を行わなかった。30番地において、わずかな作業を実施したのみである。

それが国際条約により仕様を禁止されている毒ガス〈G3〉のコロニー内への注入だった。密閉型コロニーである30番地はひとたまりもなかった。わずかな時間を費やして注入されたG3によって、当時30番地に居住していた者、集まっていたデモ参加者など、あわせて1500万人が死に至らしめられたのである。

現在も30番地はサイド1に存在しているが、そこはもはや立入禁止の無人島として、膨大な数の亡骸を腹の中に抱えたまま捨て置くに任されている。

それがジャンマリーが何度か口の端にのぼらせ、最後まで語ろうとしなかった30バンチ事件の内容だった。アントニオは、自分がこれほどの大事件を知らなかったのは地球にいたからだろうかと考えた。ジャンマリーは違うと、宇宙移民ですらこのことはほとんど知らないと言った。

なぜならティターンズが各方面に圧力をかけ、報道も何もかも抑え

込んでしまったからだという。

ゆえに30番地に係累があった者でも不用意にそのことを口にすれば何をされるかわからないような、そんな有様だったというのだ。

政府の公式記録では30番地で致死性の感染症が蔓延したため、コロニーごと遺棄せざるを得なかったということになってさえいるらしい。

そして、やはり宇宙移民であつてもこの事実を知らないというジャンマリーの言葉は正しいようだった。

ドナはまるで関心のなさそうな顔で話を聞いていたが、初めて耳にする虐殺の話に心底驚いたらしく、途中からは神妙な顔をしてアントニオの言葉に聞き入っていた。

「信じられないわ……本当にそんなことがあつたつていうの？」

「僕も最初はそう思つたさ。でも複数のニュースサイトをまわつてみたんだ。大きめのサイトでは扱っていなかったけど、アンダーグラウンド系つていうのかな、そういう類のサイトでは、この事件を扱っているところをいくつか見つけたし、映像を載つてるところ さえあつた。いい加減な記事を載せるところもあるから、こういうサイトの信憑性つていうのはそんなに高くないんだけど、それでもいくつかテイターズに潰されたところもあるつていうから、あながち嘘つてわけでもないようだ」

会話を続けながら、アントニオは自分がどんどん興奮していくのを感じていた。それは普通に暮らしているだけでは決して知ることのできないものを知つた純粋な知的興奮であつたかもしれない。

しかし同時にそうして知つた虐殺に対する怒りといったものが彼を奮い立たせていたの

かもしれない。

君も「許せない」と言つてくれ。

驚き醒めやらず、言葉少なくなつているドナを見つめながらアントニオは強く思った。果たして、彼女は顔をあげ、まぶたにかかった前髪をかきわけながら言った。

「何だか嘘みたいな話だけど……つていうか、大きなニュースサイト



では扱っていないんでしょ？」

「やつと何か言ったと思つたらそんなことだったから、アントニオは少々拍子抜けした。何だか話の軸がずれていることに気づかなかつた。」

「それはテイターズが報道メディアに圧力をかけているからさ」

「でも、いい加減なアンダーグラウンドとか言つてたじゃない。そのサイトってちゃんとしたところなの？ 嘘を書いていたりすることもあるんじゃない？」

少し言葉に詰まった。

「それは確かにそうだけど……でも、もしこのニュースが捏造なのだとしたら、エウーゴが軍事的行為に打つて出た理由自体が揺らいでしまうことになるんだよ。結果から過程をたどるといふのなら、これが捏造であつていいはずがないじゃないか」

「ふうん、それはどうかしら？ たとえばエウーゴが戦争をする理由をこじつけるために捏造したニュースとも限らないんじゃないの？」

「あなたの見たニュースサイトにエウーゴが関係していないなんて、どうしていえるの？」

「そんな風に疑つてかかっちゃ……」

「何でもかんでも鵜呑みにしてしまうのだから、同じくらい危険なことじゃない？」

「まあ、確かにそうだけど……」

「ドナはモンブランが沈む光を見ていない。母艦を失つて混乱してしまつたジャンマリーの姿を見ていない。だからかつての自分と同じように、いきなりこんな話をして実感湧かないのに違いがない……。」

「どうしたらドナにわかつてもらえるのだろうか、アントニオは一生懸命考えていた。その姿はちよつとよほくれたようにも見えて、まるで子供でもあやすかのようにドナが優しげな口調で言った。」

「ほらほら、こんなことでふてくされないの。どうでもいいこと言い争つたつて仕方ないじゃない。いま大変なことになっているわけじゃない、事実だろうが何だろうが、そんなのあたしたちには関係な

いのよ」

「そうなのかな……」

「そうよ。30番地に住んでいたとかっていうんならともかく、私たちはいまグラナダにいるんだから。あなたは地球生まれだけど、それならむしろ30番地生まれじゃなかったことをラツキーに思った方がいいんじゃない?」

「……えっ?」

言葉の意図を判じかねて、思わずアントニオは息を呑んだ。

「あたしもグラナダ生まれで本当に良かったわ。何かの間違いであそこで暮らしていたら、今ここでこうして美味しいワインを飲むこともできなかつたものね」

まるで遠くで起こった天災のニュースを話題にするみたいに、いつもどおりの口調でドナが言った。だからアントニオは、息を呑んだつきり何も言えなくなってしまった。吐き気をもよおすような耐え難い違和感が、二人の間にそびえる燭台のあたりに滞留しているような気がした。こめかみのあたりがジリジリと痛んだ。

「ちよつと、大丈夫?」

思わずこめかみに手をやったアントニオに、ドナが心配そうな声を上げた。何でもないと言うかわりに、空いている方の手で彼女を制止しようとしたが、彼女は心配そうに眉根を寄せて彼の顔を覗き込むのだった。

「あんまり強くないのに飲み過ぎたんじゃない!? 明日はふたりで出かけるんだし、暗い話はやめにして、もう帰って休みましょうよ。本当、あなたつたら最近暗い話ばかり。きつと疲れが溜まつてるんだわ」

ああ俺は決定的なスイッチを押してしまったんだ——痛むこめかみに線を引かれたこちら側で、アントニオはぼんやりそんなことを考えていた。

## 第十話 「まるで犬のよう」

休日は名ばかりのものに終わったような気がしてならなかった。つきあい始めたばかりの恋人とふたり仲睦まじく買い物に出かけた。り、食事をしたり、あるいは映画を観てみたり——結構な話である。あげくその相手が会社の女性社員の中でも五本の指に入ろうかという美人であれば、これは羨ましがられることはあっても、その逆というのはちよつとありえそうにない。

そうであるにもかかわらずアントニオは心のどこかで苦痛めいたものを感じていた。もしかしたらそれは苦痛といった類のものではないのかもしれない。不安というべきか。彼女と肩を並べて映画を観ていても、何をしても落ち着かないのである。

まるで犬のようだと思った。首輪をつけられて、決められた範囲にしか遊べない飼い犬だ。表を見れば、敷地を区切る塀のむこうに野良犬が通りすぎてゆくのが見える。彼らはアントニオがうかがい知れないような何かを求めるように、あるいは追い立てられるように行き過ぎていく。

縦横無尽に駆けめぐる彼らがひどく重要なことをしているように思えてならない。だがアントニオには首輪がついていて、通りに出ていくことすらままならないのだ。

一夜明けて出勤したアントニオがオフィスに姿をあらわすと、その奥に別室に区切られている彼の個人オフィスにたどりつく前に、待ち受けていたようなスタッフたちに取り囲まれてしまった。

「課長、いったい何があったっていうんです!？」

彼らが異口同音にそうまくしたてたので、アントニオは胸の内を見透かされたような気がしてどきりとした。だが冷静に考えてそんなことがあるわけがない。もみくちやにされて乱れた背広の襟を直しながら、アントニオは懸命に冷静を装った。

「血相を変えて、みんなどうしたんだ一体?」

「だって、ドミントを改装するなんて言うじゃないですか! 一体何の必要があつてそんなことをするんです!？」

「……なんだって?」

状況を把握しかねたアント二オが質問に質問で返す。

「さんざん揉めたあげく決まったデザインじゃないですか、いまさら外装を変えるだなんて……!!」

「ちよつと、なあちよつと待ってくれ。どうということだ、説明してくれ」

「説明も何も——別部門の連中がゆうべから増加試作機をいじりまわしてますよ。無事なのは試験中の原型機だけです」

鞆を手近なデスクに投げ出すと、アント二オはオフィスを飛び出した。何がどうなっているのかさっぱりわからないが、休みの間に何か大きな動きがあったことは事実だ。確かに現在の自分たちはテストチームであり、増加試作機に関してはノータッチだったが——それにしても外装の変更とはどういうことだ!?! スタッフたちが口々にうったえたように、さんざん議論した末に決定したデザインではないか。

通路を走り抜け、いくつかの角を曲がり、清潔な内装と明るい照明に彩られたオフィス棟を抜け、工場棟に駆け込み——そしてアント二オは信じられないものを目の当たりにした。

果たしてそこには12機のドミンゴが列をなしていた。しかしジャンマリーの駆るドミンゴと血を分けたはずの彼らは、まるでドミンゴという名を放棄してしまったかのように異様な姿へとその身を変えてしまっていたのである。

「なんだこれは……」

注意してよく見れば、それはドミンゴに間違いないのだった。腕も足も胴体も、ほとんどすべてがドミンゴのままである。それにも関わらずこれがドミンゴに見えないというのは、それは一体どうしたことか。

12機のドミンゴは、まだすべてにそれが施されているわけではなかったが、機体色をリックディアスの濃紺からスポーツカーのようなオレンジへとあらためられていた。

右肩はアント二オたちがハイザックのシールドをそのまま転用し

たものが装備されているはずだったが、そこには見たこともないタイプの折り畳み式シールドが取り付けられている。

そして何よりも違うのはガンダムタイプのデザインとした頭部が、かつて却下となったモノアイのジオン顔に換装されていることだった。いま再びザクタイプの風格を取り戻したようにも思われる12機のMSは、モノアイのともっていない扁平な眼窩からアントニオを見下ろしているようでもあった。

「こんな……いまさらこんなことをして何の意味があるっていうんだ。プロジェクトはもう大詰めなんだぞ！」

工場内に出ていくと、アントニオはドミンゴの再塗装をしている連中のひとりをつかまえて詰め寄った。

「いったいこれは何だ、誰に言われてこんなことをしているんだ!？」腕をつかまれた作業員がアントニオの剣幕に気圧されて首をすくめる。

「知りませんよオ、そんなのは上に聞いてくれればいいじゃないですか。こっちは指示があったからやってるだけです。改装作業からずっと、それこそ徹夜で働いてるっていうのに、なんだって怒鳴られなくちゃならないんです」

不満もあらわににそう答える作業員を放り出すと、アントニオは背を向けて走り出した。背後で何やらぼやいているのが聞こえるが、残念ながら今は気にかけていられない。

こんな悪ふざけみたいな指示を誰が出したのかは知らないが、プロジェクトを統括する最高責任者であればすべてを了解しているはずだ。

再び背広の乱れを整えると、アントニオはマクローリン設計局長のオフィスへと歩を進めた。

「まったく……ついこの間スタッフをさぼり抜きにさらっていったくせに、まだうちのチームをいじめ足りないってのか、冗談じゃない！」

\* \* \*

マクローリン設計局長のオフィスに出向いたアントニオは、局長からまるで信じられない説明を受けた。

「すみません。おっしやられてる意味がよくわからなかったのです  
が」

「うん、まあ、急な話だったから無理もない……たまたま君が休みだった  
せいで事後報告という形になってしまったのも、申し訳なく思っ  
てるよ」

必要以上に広々としたオフィスで待ち受けていた局長は、多少苛つ  
いた雰囲気を漂わせていたものの、きわめて穏健な口調でアントニオ  
をあしらった。

「私もこんな指示は出したくないんだがね。昨日上層部からお達しが  
あって、ドミンゴの仕様変更を命じてきたのだ。ああ、変更といっ  
たってそんなに大したものじゃないんだが……君も見たんだろうが、  
要するにドミンゴの外装を変えてくれというんだな。つまり別のM  
Sに見えるようにしてくれと」

「あの、それはどういった……」

「まあ、話は最後まで聞きたまえ。こちらはこちらで確認しておきた  
いことがあるんだよ。あのエウーゴから来たパイロット……」

「ジャンマリー・ロラン准尉のことですね？」

「そう、彼についてだ。彼はその……すでにこの件を知ってしまった  
いるだろうかね？」

どうしてこんなことを聞くのだろうと思いながらも、上司の手前、  
アントニオは冷静につとめた。

「さあ、それはどうでしょう……今朝はまだ顔を合わせておりません  
から何ともわかりませんが、空いてる時間から何から、ほとんど原型  
機にべったり貼り付いていますから、あるいはまだ知らないかもしれ  
ません」

「ふむ、そうであれば大変結構。詳しい説明は省かせてもらうが、くれ  
ぐれも彼にはこの件を悟られないようにしてくれたまえ。改装は別  
部門の連中にやらせてあるから、君たちは今までどおり原型機のテス  
トを続行してくれればいい。そういうことでよろしく頼むよ」

そう言うと、マクローリン設計局長はもはや眼前にアントニオが存  
在していないとでもいったように、様々な部署から集まってきた書類

の山をやつつける仕事にとりかかろうとした。それがもう退室しろという無言のメッセージであることはアントニオにも理解できた。

だが、これではまるで手ぶらで帰るようなものである。ここは何としても食い下がる場面だろうとアントニオは考えた。

「申し訳ありませんが、局長」

とたんにマクローリン局長が煩わしそうな顔をする。

「なんだね、アントニオ君。さっさと業務に戻りたまえ」

「いえ、その、もし差し支えなければ、詳しい話を……なぜこの大詰め  
の時期に改装なんてことをやらなくてはならないのか、理由をお教え  
願いたいのですが。それに、なぜ准尉には秘密にしろと？」

「差し支えなければ、だど？ 差し支えあるよ、大いに差し支えある」  
穏やかだった口調は、あれは意識的にそうしていたのだろう。食い  
下がるアントニオをマクローリンがぎよろりとした眼で睨んだ。

「わかったら業務に戻りたまえ」

語気を強めてふたたびそう言った。

「しかし……理由を把握していないと、ジャンマリー准尉をうまくか  
わせないこともあるかもしれません。彼に問いつめられて上手くか  
わせるかどうか……」

「ふん、聞いたところで後悔するだけだと思うがね」

マクローリンはそう言ってデスクから真っ直ぐにアントニオを見  
据えた。アントニオもまた視線をそらさずにマクローリンの眼を凝  
視しつづけた。

そうしてしばらく室内には沈黙が流れたが、やがて、まるで面倒臭  
くなつたとも言おうようにマクローリンがため息をつき、いつもより  
声を低くして真相を語り始めた。

「君がこの話を聞いてどう思うのかは私の知ったことではないし、ど  
う思おうが命じた仕事はやつてもらおう。それに異存はないな？」

「……承知しました」

そうとしか答えられない高圧的な雰囲気の中、アントニオは苦々し  
い気持ちで了解した。

「それでは教えるが……あの12機のドミントは、改装を完了した後

「へマラサイ」と名をあらためて、ティターンズに納入されることになった」

「……なんですって!？」

自分の耳が信じられなかった。マクローリン設計局長は、いま何と言ったのだろうか？

「近く、グラナダ宇宙港にティターンズの軍艦が入港する。それに積み込むことになったのだ。名を変えるのは、言ってしまうと悟られんようにするということだな。書類上——まあ実際そうなんだが、我々はいまエウーゴの発注を受けて汎用モビルスーツを急ピッチで開発中だ。エウーゴ内ではすでに〈MSA-002〉の番号を与えられ、多分営業部から伝わったのか知らんが、君が名付けたドミンゴという名がそのままペットネーム（愛称）として定着しつつあるそうだよ。しかしどういう経緯があったのかは私も聞いていないが、経営陣がこれを急遽ティターンズに無償供与することに決めたのだ。さて、するとどうなるか。我々はドミンゴというMSをエウーゴにも納入しなくてはならないし、ティターンズにも渡さなくちゃならない。もしエウーゴがこれを知ったら、それはそれは面倒なことになるだろう。ここまではわかるね？」

「はい、それは……確かにエウーゴの依頼で開発した機体を敵対陣営に横流しするなどということが明るみに出るとは、エウーゴも、ああそうです、ジャンマリー准尉だって黙ってはいないでしょう」

横流しという言葉聞いてマクローリンが顔をしかめる。

「めったなことを言うんじゃない。何様のつもりだね、口を慎みたまえ」

「……申し訳ありません」

「ふん、まあいい。君のいうようにこれは立派な契約違反なのだからな。ついては、そのためにドミンゴの改装が必要になったのだ。君の口汚さを借りるのならさうだ、まさに偽装工作だよ。だからわがアナハイム月面工廠では以前からマラサイというMSの設計が開始されていたことにならねばならん。書類の作成は昨日からすでに進行中だ。あとは工廠の増加試作機の改装をすませればよい。それもな



るだけ急ピッチでな」

なるほどジャンマリーには黙っておけというわけである。こんなことが彼に知れたらただでは済まないだろう。

だが少し残念な気がした。彼とは、一緒に遅くまで30バンチ事件について調べたことがあったからである。あの夜の話し合いは有意義なものだったとアントニオは思っていた。ジャンマリーが抱えていたわだかまりや、アントニオが感じていた違和感の、その答えがもう少しで得られそうな空気がそこには確かにあったのだった。

もつと直接的にいうのであれば、アントニオは彼との間に友情が築けそうだと感じていたのだ。プロジェクトの開始当初に標榜したテストパイロットとの間にあるべき信頼関係といった類の、あるいはそれ以上のものを得られそうな気がしていた。それだけに自分のあずかり知らぬところでこんなことが取り決められていたのは衝撃だった。ジャンマリーには秘密にしておけというが、彼に嘘をつかねばならないというのは何とも心苦しいものがある。

「不満そうだな……君は親エウーゴ派だったかね？ 地球生まれだから、テイターズ派でもおかしくないと思っていたんだが」

マクローリンの話はどこかずれている。いや、自分がずれているのか。

「私はとくにどちらだということもありません……その、ないと思います」

「なら、そんな渋い顔をする必要もないだろう。君がプロジェクトを無事に進めてくれた実績自体は、何も揺らぐことはないのだからな。今回はプロジェクトのためグラナダに出向してもらった形だが、おそらく次の異動で正式にグラナダ勤務の辞令も下りるだろう。そうになったら、いよいよ私の片腕として力を発揮してもらおうと思っっている。なあに、君は今回の件ですでに実績を上げているんだ、とやかく抜かす連中は私が黙らしてやる。来年の今頃には君も副局長というわけだ」

ああそれは……それは地球にいた時からアントニオが望み、待ちこがれていた瞬間だった。グラナダ出向が決まった時からもしかした

らと期待を胸に描き、大きなチャンスが巡ってきたのだと心躍らせ、こうなったら何をどうしても出世して本社に永続勤務してやると情熱を燃やした、待ちこがれた瞬間のはずだった。

そうだ、この瞬間を待っていたはずだ。

そうであつたはずなのに。

「それは……身に余る光栄です」

心とは裏腹にアントニオはそう答えていた。マクローリン設計局長は微笑み、しかし彼の胸のうちを察したように、まるで諭すような口調で言った。

「口先ではそう言いながら、どうにも納得のいかない顔をしているじゃないか。まあ、まだ君は若いから仕方ないんだろうな。だが企業に、それも戦争屋を商売相手に行っている企業に身を置く以上、こういうこともあると憶えておきたまえ。そう考えればいい勉強にもなつたというものだろう」

「しかし……」

「いいかね。君の仕事はどこまでも現場に徹することなんだ。そうであれば、いまはとにかくいいMSを作ることに専念するべきだと思わないかね。その結果できあがった製品を最大限の利益をもたらすべく活用していくのは、これは我々の上の人間たちが決めることなのであつて、すなわち、我々にはもはや責任のないことだと知りたまえ」

## 第十一話 「ターニングポイント・前編」

わずかな期間のうちに改装を終え、改めてマラサイと名付けられた12機のMSは、入港したばかりのティターンズ所属の軍艦へアレキサンドリアへに積み込まれることとなった。

非公式の取引であるこの納品業務は、カモフラージュの意味も兼ね、わざわざアナハイム側が軍港まで運搬していくという手順をとった。それはアントニオがマクローリンと協議した結果決めたもので、この事実をジャンマリーの目から隠蔽するという意味合いが大きかった。

最後のマラサイがコンテナの中に収まった時、アントニオは大きなため息をついた。指示どおり、なんとかジャンマリーに知られることなく仕事を終わることができたのである。マラサイを積み込んだトレーラーが軍港へ出発するのを見届けると、アントニオは続行中のテストに合流するために管制室へと急いだ。

現時点でたった1機になってしまったドミンゴは、相変わらず良好なテスト結果を叩き出していた。アントニオが管制室へ入ると、まもなく今日のテストが終わるところだとドナが教えてくれた。

今日のメニューは主に火器コントロールシステムの試験と、戦闘を想定した各種状況での機体制御だった。まとめられたばかりのテスト結果に目を通しながら、アントニオは複雑な思いにかられていた。プログラムを見れば、今日までにはほぼすべてのテストを消化していた。明日、全面的な機体のオーバーホールを終えたら、明後日からいよいよ最後のメニューである模擬戦闘テストに入る手筈となっている。

実際、ドミンゴは戦闘に投入してももはや何の問題も発生させないだけの完成度にあるだろうと思われた。ここから先、模擬戦闘を繰り返すことで搭載するオペレーションシステムのためのデータを蓄積・洗練していけば、ますますもって完成度は高まることになる。

ドミンゴが帰投してきた。機体は係留ワイヤーにからめとられ、従順にハンガーへと運ばれていく。やがて完全に機体が固定されるの

を待って、ジャンマリーが機体を降りた。

「お疲れさん」

管制室に姿をあらわしたジャンマリーはそう言っただけで片手を上げた。スタップたちも片手を上げて応えたり、ねぎらいの言葉をかけたりして彼を出迎えた。

アントニオが変わりはじめているように、ジャンマリーもまた変化しはじめているように見えた。少なくとも、いまのようにちよつとした会話らしきものを皆と交わすようになったし、挨拶もするようになった。なによりいつも仏頂面だったその表情には、多少の穏やかさも受け取れるものが浮かび上がっている。

それにともなって皆との距離も縮まってきたように見える。アントニオとの距離もぐつと縮まった。いままでの彼なら必要ないと判断して口にしなかったようなことを、アントニオに向かって語りかけたりするのだった。

「明日オーバーホールを済ませたら、いよいよ模擬戦闘か。仮想敵機アグレッションは何だ？」

「初日はハイザックと1対1の模擬戦ですね……我が社のテストパイロットが搭乗します」

「ハイザックに遅れをとる気はしないが、まあ本職のパイロットの腕の見せ所というところだな」

「そうですね、ドミンゴの初舞台だ」

出会った時の印象からすれば、ジャンマリーは本当によくしゃべるようになった。だが彼がしゃべればしゃべるほど、アントニオはうしろめたさを感じてしまうのだった。

彼の態度が友好的なものに変化したのは、それは彼の信頼を得られたからに違いなかった。それなのに、彼の知らないところでアントニオは、その信頼を裏切るようなことをやっている。

だから彼の態度が和らいでいくほど、アントニオは身も心もこわばらせていく羽目に陥るのだ。

「もう少しで君たちともお別れなわけか。それを思うと少し寂しい気もするな……そうだ、幸い明日はテストもないわけだし、お別れの前

と一緒に酒でも呑まないか。あの社員住宅ときたら、豪勢なことにホームバーまでついているからな」

「ええ、いいですね」

「ジャンマリーに酒を飲むなどと言われて、アントニオは耳を疑う思いだった。できれば今は酒など酌み交わしたくはないような気がした。しかし面と向かって断るに足る理由をアントニオは持ち合わせていなかった。

それで、気が付いた時にはそんな言葉を口にしていた。

ジャンマリーが嬉しそうに微笑むので、アントニオはどうにも胸が痛んだ。

アントニオの社宅は、ジャンマリーにあてがったものと多少離れてはいたが、同じ区画に建てられている。そのおかげでアントニオは自分の愛車にジャンマリーを乗せ、一緒に帰る段取りになった。

今晩はとくに何の約束もしていなかったが、肩をならべて帰る二人を、ドナは世界の終わりを見るような顔で見送ったものだった。

「何をそんなに緊張しているんだ？」

移動中は会話らしい会話もなく、ガレージで車を降りると、ジャンマリーが笑いながらそんなことを言った。

「別に緊張しているってことはないんですけど」

暗に緊張を認めるようなことを言いながらジャンマリーの部屋に入れば、これがほとんど生活の痕跡が見られず、初日に案内した時のままに見える箇所がいくつもあった。

「まるで生活臭がしないですね……何だか、ある意味では想像どおりというか」

「何だ、どういう意味だね」

「いやまあ、何て言ったらいいか……」

アントニオの受け答えに苦笑いしながら、ジャンマリーはキッチンに消えていった。所在なくその後ろ姿を目で追っていると彼は冷蔵庫から酒瓶をひとつ、キッチンの隅の収納からもうひとつ取り出し、グラスふたと氷、それに缶詰といった具合に次から次へとテーブルに並べていった。

最初にテーブルに置かれた酒は見慣れない酒で、何かと思つてラベルを見れば、地球から輸入されているオランダ産のジンであった。もうひとつは以前からここに備え付けてあったモルトウイスキーで、封は切られていない。缶詰はニシンの塩漬けと、ソーセイジである。

「君はウイスキーの方がいいだろう」

「L字型のソファの対角に座ったジャンマリーがそう言つてウイスキーの栓を開ける。」

「ワインがあればよかつたんだろうが、すっかり忘れていてね……ロックかね？ それとも水割りがいいのかな？」

「そちらはジンを飲まれるみたいですから、ここはロックでいただきますか。それにしても珍しい酒を飲みますね？」

「ああ、私はもともとオランダ系で、我が家では昔から酒はジンと相場が決まっていたものだから、ことさら愛着があつてね」

「なんだか意外な気がした。」

「……どうしたね？」

「いえ、その、准尉の口から〈我が家〉なんて言葉を聞いたものですから」

「私にだつて家族くらいはいるさ。エウーゴが蜂起した直接の理由は30バンチ事件だが、それを言うなら私がエウーゴに参加するきっかけになつたのは家族が理由だ」

「ちよつと待つてください。そんな立ち入つた話、僕なんかが聞いていいものなのかどうか」

ウイスキーを満たしたグラスをアントニオの方によこしながら、再びジャンマリーが笑つた。

「かまわんよ。どうもその……いや、これは距離を置くようにつとめていた私の態度もまずかつたんだろうが、どうやら君たちは私のことを血の通つた人間だと見てくれない節があるからな」

「いえ、そんなことは……」

「いやいいんだ、何せ昔から堅物呼ばわりされてきているからな。取り柄と言つてはおかしいが、私にはそれくらいしか持ち合わせているものがなくてね、戦争が終わつた後の身の振りようを考えると今から

不安でさえあるよ……なにせティターンズのジオン狩りのせいでも  
よりももうないからな。30バンチ事件以外にも、ティターンズの横  
暴はあちこちで行われているんだ。サイド3なんてそりゃあひどい  
ものだった」

「そうだったんですか」

「いきなり暗い話をしてすまん」

そう言つてジャンマリーは苦笑した。

ソファに腰掛けてから、わずかな時間にいろいろなことを知つてし  
まった。雄弁でありながらジャンマリーの話はどこか言葉足らず  
だったが、それでも彼がオランダ系移民の血を引いた人間で、ジンを  
好み、家族をティターンズに殺されたことを知ってしまった。

出会つた頃はまるで無愛想で笑うことすらせず、人の輪に加わるこ  
ともまれで、およそこの世に存在していないような立ち振る舞いだつ  
た彼が、アントニオの中で急速に存在感を増してくるのが感じられて  
ならなかった。

彼にも家族があり、それにまつわるエウーゴに身を投ずるに至つた  
理由があり、そのために命をかけて戦っているのだ。そう思えば自分  
がアナハイムに入社しようと思つたのはなぜだったろうか。家族に  
はもう何年会っていないか知れない。

「君の話も聞きたいね。私と違って、君には明るい話題も多いだろう。  
たとえばあの秘書の女の子とはその後うまくいっているかね?」

ジャンマリーが突拍子もないことを言い出したので、アントニオは  
ウイスキーを吐き出しそうになった。

「何をいきなりそんな……」

ひどく狼狽したアントニオを見てジャンマリーがまた笑つた。部  
屋の空気が少し和んだようになる。

「見ていればわかるとも。パイロットの勘と言つたらいいすぎだが、  
たとえば周囲を取り巻いたどれが敵でどれが味方か、敵が複数なら最  
初に落とすべきターゲットはどれかを、頭で理解するよりも早く肌で  
感じているようにね」

「何といつたらいいか……まあ准尉のおっしやるとおりなんですけ

ど。でも最近はどうも聞いていません。こんなこと言うのも倦怠期の夫婦みたいで難なんですけど、価値観の違いっていうんですか、何ていうかうまく噛み合わない感じなんですよ」

「そうか、そいつは残念だ……いや違うな、もっと気の利いた受け答えができればいいんだが」

「かまいませんよ、准尉だってプライベートの辛い話をしてくれただですし」

「うんまあ、それはそうなんだが……なんだ、額を付き合わせて酒を呑んでみれば、お互い明るい話題など持ち合わせていなかったってことか。そうになると、明るい話などドミンゴのロールアウトが近いことくらいしかないじゃないか」

ドミンゴの名が出て、再びアントニオはどきりとなった。グラスを持つ手がびくりと止まり、中の液体がゆらゆらと揺らんでいるのが見える。

増加試作機はもうグラナダにはないのである。マラサイと名を変えた彼らはテイターズズの軍艦に積み込まれ、すでに出発してしまつた。テストチームでそのことを知っているのは自分だけだということに心苦しい。ジャンマリーは知らないのだ、この場に明るい話題などもうありはしないのだということ。

言わなければならぬと思った。ここでその話題に触れるのは酒の力を借りるようで女々しくもあつたが、それでも伝えなくてはならないとアントニオは思ったのである。何となれば、それが誠実な者をする前にした時のあるべき態度であると思えたからだ。

いまの自分は、言うなればテイターズズに荷担しているようなものだった。30バンチ事件が今もって隠蔽され続けているように、不誠実な行いはまたしても取り返しのつかない場所にしまい込まれようとしている。

「准尉、ドミンゴのことなんですが……」

「准尉と呼ぶのはよせと言ったはずだ」

ジンがまわってきたのか、少し顔の赤くなつたジャンマリーが責めるような目でこちらを見た。



顔が赤くなっている——ああ、この男には血が通っている。

「ジャンと読んでくれてかまわんよ。モンブランの連中は皆そう呼んでいた」

現実には血を通わせた、実体のある男がそう言って、アントニオは胸の内に何かがこみ上げてくるのを禁じ得なかった。もう一刻の猶予もおけなくなっていた。

「ジャンマリー……僕はせつかく手に入れたあなたの信頼を失ってしまいそうだ」

だがその言葉を最後まで言うことはできなかった。

何の前触れもなく電子音が鳴り響き、アントニオの背広の内ポケットで携帯端末が震えていた。

## 第十一話 「ターニングポイント・中編」

『ちよつと！ 一体何がどうなっているっていうのよ!』

電話の向こうでわめき散らしているのはドナである。あまりの剣幕にアントニオは思わず携帯電話を耳から遠ざけ、彼女に怒鳴られる理由などあったかと考えた。しかし何より今まさに重大な告白をしようとした、その勢いをくじかれたような気がして、彼は少し腹がたつた。

「そんなに怒鳴らなくても聞こえてるよ。一体何に腹をたててるんだ、君は」

『怒ってなんかいないわよ！ そうじゃなくて、とにかくTVをつけてみて、TV！ どのチャンネルもこのニュースで持ちきりよ!』

スピーカーから漏れ聞こえる声は、当たり前のようにジャンマリーのところまで届いていた。無言で彼がリモコンのスイッチを取り上げ、TVをつけた。

画面には破壊された宇宙港の映像が映し出された。どこのものはわからないが、殺風景な雰囲気から察して民間のシャトル発着場ではなく、工業区の資材船発着場か何かを思わせる風景だった。それがめちやくちやに破壊され、あちこちで上がる火の手に、消防署のプチ・モビルスーツが消火剤を噴射している。

「これ、どこの映像なんだ？ まさかうちの船が事故でも起こしたんじゃないだろうな!？」

『そっちの方がまだ良かったわ！ どのチャンネル見てるの!？ ちよつと4チャンネルにしてみて!』

ドナの音声を聞き取ったジャンマリーがチャンネルを変える。

すかさず画面が変わり、緊張した面持ちのアナウンサーがニュースを読み上げている姿が映し出された。

「——繰り返し速報でお伝えします。つい先ほど地球連邦宇宙軍特殊部隊ティターンズによつて月、アンマン市が攻撃を受けました。攻撃は巡航ミサイルとMS機動部隊によつて行われ、アンマン宇宙港に停

泊していたエウーゴ艦隊のMS部隊と戦闘状態に突入しました。攻撃の事前通告が行われなかったことでティターンズに対する批判の声が上がると考えられますが、ティターンズはアンマン市をエウーゴの拠点とする確証を得ていたとする情報もあり、これが事実であればアンマン市民からはむしろエウーゴに対する批判が上がりそうだとも考えられます」

「一般市民の住む都市にミサイルを撃つただと……正気か!?」  
リモコンを持ったままジャンマリーが固まっていた。

アントニオには、ドナがそれほどまでに感情を爆発させている理由がまだわからない。

やがて画面はアナウンサーの座るスタジオから、VTR映像に切り替えられる。画像がそれほど鮮明でないのはミノフスキー粒子が戦闘濃度まで高まっていく過程の、その電波障害を受けたからであろう。

画面の中でMS同士による戦闘が行われていた。2機のオレンジ色のMSが、白い機体を相手に駆け回っている。それらが追いつ追われつつ、おそらくアンマン市付近の月面のどこかに設置されているであろう定点観測カメラをかすめ、画面から消えていった。

白いガンダムタイプのMSと、オレンジ色のモノアイのMSだった。

アントニオは呼吸が止まるような衝撃を覚えた。

「ティターンズの艦船からのミサイル攻撃により、主にアンマン市工業区がかなりの被害を受けた模様です。現在消火作業が進められています。戦闘が終了して数時間が経過した現在も、まだ完全に鎮火されていません。また死傷者はかなりの数にのぼる見込みですが、正確な人数は現在のところ——」

アナウンサーがしゃべり続けている。その間、短い時間だけしか録画できなかったであろうVTRが繰り返し画面にあらわれ、カメラをかすめていくMSの姿が何度も映し出されている。

『あれ……ドミンゴよねっ!』

電話の向こうでドナが言った。

『色も違うし、形もちよつと違うけど、毎日見ていたんだから間違えるはずがないわ。まだロールアウトしていない機体がなんで戦っているわけ？ どうしてこんな近くで戦いが起こっているっていうの!』

ドナの、まるでアントニオを責めるような剣幕に、思わず彼は携帯端末の通話スイッチを切ってしまっていた。やりきれないような苦悶の声とともに放り投げると、壁に跳ね返った電話が床に落ちて乾いた音をたてた。

携帯は床にひび割れ、アントニオは腰が砕けたようにその傍らに座り込むと、下を向いたまま黙ってしまった。ジャンマリーが何度か声をかけたが、まるで返事をしない。カーペットの上に何か見えてもいるかのように、ただアントニオはなにもない一点を凝視するのみである。

落ち着くのを待った方がいいと判断したらしく、ジャンマリーはTV画面の方へと向きなおった。アントニオに背を向けながら、再び繰り返されるVTRの映像を吟味するのようにつめていた。

多数の死傷者が出たらしい事件である。どこの番組でも臨時ニュースとして報道したようだったが、事態にさほど進展はないのだろう、アナウンサーがさつきと同じ文面を読み上げると、VTRの再生が交互に繰り返されていた。

またしてもオレンジ色のMSがカメラの脇をすり抜けていく。それはプロジェクトに携わった者であれば、誰でもドミンゴだと判別できるだけの特徴を備えている。ジャンマリーは顎に手をやり、前のめりになって画面に近づいた。

『ただいま続報が入りました』

不意にVTRが尻切れに終了し、なかば強制的に画面がスタジオに戻った。アナウンサーが緊張した面持ちで画面の方を睨んでいる。

『たったいま入った情報です、再びティターンズとエウーゴが交戦状態に入った模様です。月宙域ではありません。もう一度お伝えします、これは月宙域の映像ではありません——』

画面がまた切り替わり、絵の具をぶちまけたような、見たこともない風景を映し出した。そこで複数のMSが、より正確に言うのならお

びただしい数のMSが、戦闘らしきものを繰り広げていた。

それは画面一杯を埋め尽くした地球の映像だった。宇宙空間から撮影した地球が四角いフレームいっぱいになり、水色の上に茶色や白や、様々な色の絵の具を散らかしたかのようなマーブル模様を描いている。その上空でMSたちが戦闘を行っているのだ。

戦闘高度を見誤れば、地球の芯から真つ直ぐ伸びる重力の手に捉えられ、そのまま大気圏に突入してしまうような場所である。およそ正気の沙汰とは思えぬ映像だった。これはTV局も危険を冒して撮影船を派遣するというものである。

しかしジャンマリーは戦っている彼らが十二分に正気を保っていることを承知していた。興奮気味に、独り言のようにぼそりと言った。

「地球降下作戦をもう実行するっていうのか……いくらティターンズの追撃をかわせなかったといえ、アンマンからこのルートに直行するとは」

『現在ご覧にいただいている映像は、現地からリアルタイムで届けられているものです！ 大気圏上での大規模な戦闘はこれまでに例のないものですが、この戦闘が果たしてどういった意図で行われているのかなど、詳しいことはまだわかっておりません。ご覧のとおり、現在も激しい戦闘が続いている模様です』

戦闘をまるでショーの解説でもするかのように、興奮気味にアナウンサーがしゃべっている。ジャンマリーの背後ではアナウンサーの剣幕に我に返つたらしいアントニオが、脇から覗き込むようにしてTV画面を見つめていた。画面には様々なMSの姿があった。GMⅡもいる。ハイザックもいる。そしてリックディアスがあり、数こそまばらだか件のオレンジ色のMSの姿があった。

それを見た途端、再びアントニオは肩のあたりをこわばらせたが、それでも画面から目を逸らすことができなかった。画面の中で、次々にMSたちに変化が起こっていったからである。

MSたちはそれがエウーゴの物であるにせよ、ティターンズの物であるにせよ、ほとんど一斉と喋っているタイミングで装着していた才

プシオンを作動させたのである。途端にバックパックの上に後づけされたコンテナのハッチが吹き飛び、大気圏からの風にあおられるようにパラシュート状のものを展開していったのだ。

「バリエータ・システムだ……」

アントニオがそう呟き、一瞬だけジャンマリーが振り向いた。そうしている間にも展開されたパラシュートは半球を形成し、半球の表側を地球の方へ向けてMSを覆い隠していった。巨大なカップ状の中にMSをしまい込み、摩擦熱から機体を保護する、大気圏突入用のオプシオン装備である。

この装備を開発したのはアナハイムの系列企業である。だから見るのは初めてでも、アントニオにはそれが何かがわかったのだ。さらに気づいたことといえば、当然のようにエウーゴ・テイターズの本陣営がバリエータ・システムを使用しているという事実だった。テイターズのパラシュートはオレンジ、エウーゴのパラシュートは薄いグレーのバリエータを使っている。だが色こそ違えど同じ製品だ。

「何だ!？」

危険高度に達したMSたちが次々とバリエータを展開していく。その中にただ一機異質なものが混じっているのを目にとめて、ジャンマリーが思わず声を上げた。

それはグライダーのようでもあり、また遠目にはサーフボードのようでもあった。そんな印象の見慣れぬデルタ翼の機体の上に、エウーゴのガンダムマークIIがまたがっていた。バリエータを展開し、もはや自由落下に身を任すしかなかった敵機を通り抜けざまに狙撃していった。

「マークIIか! しかし、あの機体は何だ?」

「フライング・アーマーですよ……ほら、例のへ乙計画の叩き台になったものです」

当然、それもまたアナハイムの製品であった。アントニオたちがドミンゴのテストに追い込みをかけている頃、別の部署ではこんなものを作っていたのである。だがそれは「へこんな物」と呼ぶには語弊のある代物だった。バリエータに保護され、もはや自由のきかなく

なった両陣営のMS群の中を、フライングアーマーは自由自在に飛び回っていた。技術者でなくてもわかることだ。この戦場において圧倒的な優位に立っている。

だがそれを追い詰める、いまだバリュートを展開しない2機のMSの姿が画面に飛び込んできた。画面の向こうにオレンジ色のMSがあらわれたかと思うと、まるで吸い寄せられるかのようなスピードでガンダムマークIIの操るフライング・アーマーへと突進していく。

「あれは……」

眩きながらジャンマリーはアントニオの方をうかがった。画面にバリュートが登場すればあれはバリュート・システムだと、画面をガンダムマークIIが横切ればあれはフライングアーマーだと、いちいち指摘してみせたアントニオが今回に限って口を閉ざしたままだったからだ。

「アントニオ。私はあのオレンジ色の機体を見たことがない。あれは何だ？」

アントニオはしばらく黙ったままだった。だが、やがて抑揚のない小さな声でぼそりと言った。

「あれはティターンズのマラサイという新型です。すでにお気づきでしょう……あれは、もとはドミンゴだったものです」

ジャンマリーが驚きに身をこわばらせたその瞬間だった。アントニオがその正体がドミンゴであると暴露したオレンジ色の機体が、マークIIの放ったビームライフルの一撃によってバリュートシステムを破壊された。画面の向こうでアナウンサーが呻くような声を上げていたが、もはや止められるものではない。大気圏突入の手だてを失ったマラサイは、大気圏の熱に焼かれながら少しずつバラバラになっていき、やがて見えなくなった頃にひとつの爆発光となった。

『これ以上は危険と判断して、いったん中継をストップします。ではあらためてこの戦闘を検証してみましょう。スタジオには軍事評論家の先生をお招きしております——』

ジャンマリーはテーブルへ行くと、無言でリモコンを掴み上げ、TVを消した。そしていよいよアントニオに向き直り、冷静な声で言っ

た。  
「どういふことだ。説明してくれ」



## 第十一話 「ターニングポイント・後編」

ジャンマリーがTVを消すと、まるで0気圧になったエアロックのように何の音もなくなってしまった。動くものもない。携帯電話はひび割れて床に転がり、アントニオは腰の砕けたように床にうずくまり、ジャンマリーは腕を組んでそれを見下ろしている。

音のみならず、この部屋が世界そのものから切り離されてしまったのではないか。

そんな風に思ったアントニオの脳裏に、さきほどのTVの映像が鮮明によみがえった。

バリユートが破壊され、無抵抗に落下していくマラサイ。熱気流に焼かれて千切れるように吹き飛んでいくその外装。はるか彼方に落下を続け見えなくなる機影。やがて起こった爆発。

あの瞬間、アントニオには名の知りようもない誰かが死んだのだ。TVのスイッチを切ってしまったところで戦闘はまだ続いている。

世界は遮断されてなどいない。この部屋はちゃんと世界につながっている。たった今までTVに映っていたあの戦場へ応答なしに続いている。彼が設計に携わったMSはいまこの瞬間も地球上空で戦い、誰かの命を奪い、奪われている。

「僕は取り返しのつかないことをしてしまった！ ジャンマリー、僕は取り返しのつかないことを！」

弾かれたように立ち上がったアントニオはジャンマリーの肩を激しく揺さぶり、声のかぎりに叫んだ。

恐慌の様子を呈した、大きく開いた目からは涙があふれていた。手のひらは汗ばみ、掴まれたシャツの肩越しにジャンマリーに熱さが伝わっていく。

「落ち着けアントニオ！ 落ち着くんのだ!!」

ジャンマリーが怒鳴ると、アントニオはびくりと身体をこわばらせ、叫ぶのをやめた。ジャンマリーに導かれるようにソファに座ると、両手で自分の肩を抱いた。彼は小刻みに震えていた。

「たくさん死んだんだ……アンマンでも、あの作戦でも、たくさんの人

が死んだ……それをやったのは僕が関わったドミンゴなんだ」

「わかるように話すんだ、アントニオ」

「僕が殺したも同然なんだ、僕は戦争を食い物にしているんだ、人のことを笑えないんだ……」

自分たちはMSを設計して売るまでが仕事。買われていったMSがどこでどう使われようが知ったことではない。なぜなら、より優れた物を設計して、より利益を得るのが我々の仕事なのだ。

ドナやマクローリン設計局長の言葉がアントニオの頭の中に渦巻いていた。小ばかにするようなドナの顔や、苦り切ったマクローリンの表情があらわれては消えていく。

逃げていたのだとアントニオは思った。自分の仕事が戦争相手の商売であることなど、自分が設計に携わっているものが兵器であることなど、言われなくてもわかっていたはずなのだ。それなのにアントニオは土壇場まで考えて放棄し、彼らの言葉に逃げ込んだのだった。

だから12機のドミンゴがテイターズズの戦艦に搭載され、アンマニ市を襲い、エウーゴの地球降下作戦を追撃し、たくさんの人が死んだ。

悪い夢だと思いたかった。だが目の前の男が——戰場からやってきたジャンマリーという男の存在が、これが夢ではないことを雄弁に物語っていた。

「あなたなんかこなければよかったんだ……あなたに会いさえしなければ、こんなことには……」

「どうした、いきなり何だ」

なだめるようにジャンマリーが言うと、アントニオは頬を涙で濡らしたまま彼を睨み付けた。

「あなたに出会いさえしなければ、きつと何も起こらずに済んだんだ。なにひとつ疑問に思わずに毎日仕事をして、ドナと楽しくやって……そういう風に暮らせていたはずなんだ。それなのにあなたに出会ったばかりに、こんな風になってしまった……」

「しかし君は気づいてしまった。本当はわかっているんだろう？ 君

が変わってしまったのは、君自身が変わることを選択していった結果のはずだ」

穏やかな口調でそう言うと、ジャンマリーは空のグラスにウイスキーを注ぎ、アントニオの前に置いた。自分のグラスにもジンを満たし、一口含んだ後にアントニオの方に向き直った。

「まずはウイスキーでもやって落ち着きたまえ。話はその後でいい」  
長いこと沈黙が続いた。水割り用のグラスに注がれたストレートのウイスキーをアントニオはちびちびと口に運んだ。

ジャンマリーは故郷の酒を味わいながら無言でアントニオの様子を眺めていたが、グラスを空にしても彼がしゃべり出す気配がないので、何も言わずにまたウイスキーを注いでやった。

再び目の前にグラスを置いてやると、アントニオはグラスの中に揺れる酒を見つめながらようやく口を開いた。

「知らずにいた方が幸せなことって、あるでしょう」

「そうだな」

話の主導権を奪ってしまわないように、ジャンマリーが短く答える。

「でも僕はあなたに会って、色々なことを知ってしまった……いや、気づいてしまった。30バンチ事件というものがあつたことを知り、自分の仕事は何なのかに気づき、戦争が遠い異国の出来事ではないことに気づいてしまった。それなのに僕の仕事殺人の兵器を作ることに変わりはなく、ドナはそれが当たり前だと言ひ、局長はより高く買ってくれる相手に売るのが当然だと言ひ……。おかしくなつたって不思議はないじゃないですか、だから、だから僕は……」

「だから？」

「だから僕は、しよせん作つて売るだけが仕事なんだという言葉に逃げ込んで……。あなたの信頼を裏切ってしまった。本当は一緒に酒を呑む資格なんてないんです」

「それじゃあ、君は私に隠し事をしていながらここに来たというのか」「そうです……。今日、あなたがドミンゴのテストをやっている時、僕は増加試作機の搬出作業を監督していたんだ。局長の指示を受け、

エウーゴに納品するドミンゴとは別MSだと言い張るために、色も形も、名前まで変えた増加試作機を、ティターンズに納品するための見張り役をしていたんです。当然あなたには秘密にするよう指示がありました。上司の命令だから仕方ないと自分に言い訳しましたけど、本当はそうじゃない。僕はあなたの信頼を失うのが嫌だったんだ——うまくごまかすつもりでした」

そう言うアントニオはウイスキーで喉を潤した。そして話を続けようとしたが、うまく言葉が見つからないように頭を掻いたり、落ち着かない様子で目をきよろきよろさせた。

話の流れを止めるのを嫌うようにジャンマリーが口を開く。

「だが、上からの命令なら仕方ないというのもまた事実だ。君はいつかへ職場が自分たちの戦場だ」とか言っていたが、その通りだよ。軍隊だってそうだ。下の者は納得できようができまいが上からの命令に服従しなけりゃならない。納得できなかった人間が集まって結成されたエウーゴだって同じことだ。今回の地球降下作戦だって地球環境への影響を危惧して反対する者がたくさんいた。降下完了とともに廃棄されるバリュートひとつとっても、おびただしい数が南米の原生林にばらまかれることになる。そこで戦闘をすればなおさらだ。しかしいくら反対していても作戦の実施が決まったら従うしかないんだ。作戦の成功に全力を注がなくてはならなくなる」

「それはわかりますよ。でも、命令に従うのが当たり前だと割り切った結果がこれです。ドミンゴはアンマン市を攻撃し、地球降下作戦を迫撃してしまっただ」

「君がやったんじゃない。やったのはティターンズだ」

「でもティターンズにMSを供与したのは……」

「それは上の人間が決めたことだ。あるいはティターンズから圧力がかかったのかもしれない」

「……だけど僕はあなたを裏切った」

「そうだ」

アントニオが黙った。ジャンマリーは再びジンを飲み干し、静かにグラスを置いた。

「残念だといえればそれだけが残念だ。だが君は土壇場で間に合ったんだと、私は思う」

「間に合ってなんかいませんよ」

「いい物を作って、より高く買う相手に売らるってのは、ある意味では間違ったことじゃない。たとえばそれが兵器であつてもそうだ。問題は買った相手がどう使うかだ。戦場という場所がどうしてあるか知っているか？ 戦う連中だけを隔離するためだ。戦場に出た者はみな自分の信じるもののため納得ずくで戦っているんだ。そうであればこそ戦争と呼ぶに値する。アンマンを攻撃したテイターズみたいなやり口は、あれは論外だ。アナハイムだつて奴らがアンマンに、しかも事前勧告なしに攻撃すると知っていたら、果たしてテイターズの求めに応じたかどうか。君の恋人にしてもそうだ。自分の街を攻撃するかもしれない連中なら、いくら高く買おうが売ってはいけないと言つたかもしれない」

「それは……そうかもしれない」

「君は色々なことに気づいて、それを後悔していると言つたが、私はむしろ良かったと思う。要はへ見えているか見えていないか、が肝要なんだ。戦争が遠い異国で行われるものだと信じ切っているから、君の恋人は誰に売つたつていいなどと言うんだ。テイターズが何をしてくれたのか、供与したMSで何をするのか知らなかったから、君の上司たちは求めに応じたりしたんだ。そういう意味では君は少しずつピントが合つてきて、多分あのニュースを見た時にはつきり見えるようになったんだ。君は悩んだようだが、それも仕方ない。知らない方が幸せだと君が言つたように、現実を知るといふことは、それだけ悩みが増えるということなのだからな」

アントニオはしばらく黙っていたが、ふと思ひ出したように顔を上げた。

「でも……僕のことを怒っていないんですか？」

「そりゃあ少しは腹も立つが、結局すべて話してくれたじゃないか。今はそれで充分ということにしておこう。だが、これ以上ドミンゴのテストに関わることはできないな。マークIIの的にするため開発に

携わったつもりもないし、これ以上データを採ったところでテイター  
ンズのMSのためのOSが洗練されていくだけだ。そんな仕事には  
関わらんよ」

「じゃあ、これからどうするんです?」

「私はエウーゴへ帰る」

## 第十二話 「あるべき道・前編」

模擬戦闘テストに向けて、濃紺のドミングはアイドリング状態にあった。コックピットハッチは開放され、入り口の高さまで上昇したクレーンの上に、ふたつの人影がある。

「全備重量での模擬戦闘だと言って、脚部プロペラントにも燃料を入れさせておきました。友軍に接触するまで余裕で飛べるはずですよ」

「結局手伝わせる羽目になってしまつて済まなかつたな。だがこいつは恰好の手みやげになるんでね——徹底的に分析して、新型を導入したティターズのアドバンテージを帳消しにしてやる。君には迷惑をかけるが……」

ジャンマリーはそう言つてハッチの縁を叩いてみせた。アントニオが苦笑する。

「いいんです。本来なら、あなたと一緒に帰るべき機体なんだ」

「この後は、君は知らぬ存ぜぬで通せよ——せつかくの昇進を無駄にすることもない」

「最後の最後に皮肉ですか？ でも、ジャンマリーも気をつけて。戦争が終わつたら、また会いましょう……そうだ、これ」

「何だね？」

「これまでの試験データのコピーです。持ち帰つて徹底解析するといふのなら、専門家に

見せればきつと役に立ちますよ」

「こんなこととして大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。それに、これくらいしないと気持ちが悪く落ち着きませんから」

「そうか……そういうことなら有り難く使わせてもらおうよ」

ディスクがジャンマリーの手に渡つた時、アントニオが首にかけたインカムからドナの声が飛び込んできた。エアロックを解放するから、そろそろ戻れという。

「お呼びがかかつたんで、それじゃあこの辺で」

「ああ、それじゃあな」

ジャンマリーが展開したコックピットハッチの足場に乗り移り、アントニオがクレーンの昇降スイッチを操作する。

その瞬間にジャンマリーが言った。

「君も……一緒に来るか？」

「えっ」

振り向いた時、クレーンが下降を始めた。アントニオはただ呆然と遠ざかるジャンマリーを見つめている。やがてクレーンが地上に到着し、しばらくアントニオは身動きが取れないでいたが、その様子を機上から見下ろしていたジャンマリーは、やがて別れの挨拶をするかのように片手を軽く挙げ、コックピットの中へと消えていった。

インカムからは早く戻れとドナが繰り返している。

\* \* \*

管制室に戻ったアントニオは無言のまま窓際に寄り、何もない宇宙を眺めた。今、その何もない空間へアナハイムのロゴマークを付けたハイザックが飛び出してきた。あらかじめ指定された座標に到着し、機体に制動をかけている。

「待機座標は確認済みですね？ ではジャンマリー・ロラン、つづけて発進して下さい」

静かな管制室にドナの声が響き渡り、ほどなくして窓の向こうにドミノゴがあらわれた。バックパックのバーニアをいっぱいに噴かし、模擬戦闘プログラムのために設定された座標を目指す。

漆黒の闇に輝くバーニアの光をアントニオは眩しそうに見つめている。

「ちよつとー」

急にドナがヒステリックな声を上げ、アントニオが振り向いた。

「何なのよ、もう！ ジャンマリー・ロラン、所定の座標を通過していただきます！ 定位置に戻ってください!!」

「どうした？」

空々しくアントニオが言うと、呆然とした口調でドナが答えた。

「待機座標を経過して……ああ、もう、間もなく模擬戦闘空域を出てしまいます！ ジャンマリー・ロランからは応答がありません。まさか



機体に異常でも……」

「昨日オーバーホールを済ませたばかりなのに、そんなこともないだろうが……とにかくハイザックに後を追えと指示を出してくれ。うまくすれば追いつけるかもしれない。こちらで解決できるなら、それに越したことはないからな。いつだったかの暴走の件もあるし、局長たちにこれ以上睨まれるのは避けた方がいい」

ハイザックの推進量では、スペック上ドミンゴの最高速度に追いつけないことをアントニオは知っていた。仮に追いつかれたとしても、ジャンマリーは軍人である。ハイザックの1機くらいどうとでもあしらうことができるだろう。

地球降下部隊を降ろしたアーガマの艦隊がこちらに引き返してきている。きつとすぐに合流できるはずだ。

アントニオが再び窓の方へ向き直ると、ハイザックが後を追うべくバーニアを噴射したところだった。しかしその向こうを見れば、ドミンゴはもはや影も形も見えないのだった。

「さよなら、ジャン」

口の中に小さく、アントニオは呟いた。

\* \* \*

ジャンマリー・ロランというパイロットと、ドミンゴというモビルスーツは、そもそもがそれでひとつの組み合わせだった。つまり騎士と馬であり、騎士と剣であり、またあるいは槍であり、同時に功績でもあり、一方が血でありもう一方が肉であった。そういうふうになった。

だから、何としても機体を持ち帰らなくてはならないと思っていた。どちらか一方では意味をなさない。

彼が駆る機体に追従する形で建造されていた増加試作機はテイターンスの手に落ちたが、原型機たるこの機体には、彼が現世で過ごした数ヶ月間の思い出が詰まっていた。

あまりの平和ぶりに驚愕したことや、アントニオとの交流。立場や考えの違いからお互いを牽制し、あるいは対立し、しかし何よりも最後に信頼関係を築けたこと。

最初はこんな連中のために戦っているのかと憤りを感じた彼であつても、今ではそのために戦うのも悪くないと考え始めていた。アントニオのような男が暮らしているのなら、命を賭けて戦うのも、決して悪くない。

いま現の記憶を胸に、陽炎のごとき夢の世界へと還る。

「地球降下部隊が無事にジャブローを制圧できれば、この戦いも終局へ向かうだろう。そうして戦いが終わったなら、アントニオに会いにグラナダへ行ってみたいものだ。そう、今度は任務ではなく、プライベートで——」

エウーゴ艦隊の現在位置がわからない以上、無闇に飛び回るわけにもいかなかった。ミノフスキー粒子検知機の数値を見れば、濃度が標準内であることを示している。ジャンマリーは通信回線を開くと、ほとんど無意識と喋っているいい動作で周波数をエウーゴが使用しているもののひとつに合わせた。

「こちら巡洋艦モンブラン第一小隊所属、ジャンマリー・ロラン。所属コード410104。我はグラナダ・アンマン間にあり。付近の艦に収容を要請す」

ボイスレコーダーにメッセージを録音すると、5分おきに発信するようセットした。艦隊はまだ月の近くにいるはずだ。うまくいけばすぐに合流できるだろう。

問題はそれまで無事でいられるかどうかだった。突如甲高い警戒音が鳴り響き、弾かれるようにレーダーに目をやれば、ジャンマリーの航跡を辿るようにして接近する1機のMSの機影がそこに認められた。エウーゴの者ならいざ知らず、連邦の連中が単機で接敵しようとするなど、まずありえないことだ。

明らかにこちらを追跡しているその動きは軽率な偵察機か、それともアナハイムが急遽発進させた追っ手であろうか。

宇宙移民が暮らすグラナダにほど近い宙域である。身を隠せるようなものなど、隕石のかけらひとつもあるわけがなかった。レーダー上のマーカーが徐々に距離を縮めてくる。

「こちらは非武装だが……どうにかするしかあるまいな」

ジャンマリーは機体をひるがえすと、迫りくるものを迎え撃つべくペダルを踏み込んだ。脚部の姿勢が自動的に制御され、脚部と背面のバーニアが推進軸を同調させる。即座に強烈なGがジャンマリーをシートに叩きつけ、目眩のような恍惚感を味わわせながらドミンゴが弾丸のように飛翔する。

相対距離を示す表示が目にも止まらぬ速さで変動し、マーカーが迫る。全天周マルチスクリーンの一角に〈所属不明機接近〉のアラートが踊る。

やがてカメラが敵機を捉える。自動的に映像を拡大していく。ハイザックだ。

確認する間に敵機はぐんぐんと迫り、ドミンゴはハイザックの右脇を猛スピードで通過した。民間カラーのハイザック。シールドにはアナハイム・エレクトロニクスのロゴマークが入っている——あれは模擬戦の相手になるはずだったハイザックだ。

ならば相手も非武装だ。機動性も運動性もこちらが上だ。それを目指して作られた機体なんだ。

「うおおっ！」

激しい旋回にドミンゴはやすやすと応え、ジャンマリーは内蔵をもつていかれそうな感覚に雄叫びをあげる。巡航姿勢を解除されたドミンゴの脚がロツクから解き放たれ、ハイザック目がけて姿勢制御を始める。

「悪く思うなよー！」

ジャンマリーがペダルを踏み込みドミンゴがさらに加速する。ふたつの機影が溶け合うように激しく接触し、ドミンゴの左肩部装甲から生えた長く鋭いスパイクが、ハイザックの背部に深々とめり込む。ハイザックのバックパックから伸びていたスタビライザーの一本が吹き飛び、プロペラントタンクに大穴が開いた。

離脱する。途端にタンクから推進剤が溢れ出てくるのが見える。

「模擬戦としては一方的すぎたが、これで追ってはこれまい」

ハイザックのパイロットはこちらに機体を正対させると、両腕を突きだし、モノアイを明滅させて戦闘の意思がないことを伝えてきた。

通信回線を開けと言っている。

「冗談を言うな。私が連絡をとりたいのはエウーゴの艦隊だけだ——脚のバーニアは生きてるんだ、帰るだけならどうとでもできるだろう？」

半ば行動不能に陥ったハイザックを尻目に、ふたたび移動しようとしてペダルを踏みかけた時だった。警戒音とともに再び〈所属不明機接近〉のメッセージが表示された。

「なんだと……あっちが追っ手の本隊か？」

レーダーに新たに3機のマークが増えていた。頭上から、こちら目掛けて急接近してくる。

「どうする……やれるのか!？」

振り切るか。まだ敵だと決まったわけではない。期待を抱かないわけではない。もしかしたらエウーゴの偵察部隊か何かかもしれない。その可能性だって充分にある。

一瞬躊躇したその瞬間、今度は通信をキャッチしたことを知らせる電子音が鳴り、イヤホンから音声飛び出してきた。

『こちらエウーゴ所属巡洋艦アーガマ。貴官の現在座標を申告されました』

アーガマの通信士がそう言う間に、3機のMSがぐんぐんと近づいてくる。

「こちらはジャンマリー・ロラン准尉、モンブラン第一小隊所属、認識番号——」

うわずった声で言いながら、ジャンマリーはドミンゴを反転させる。いまや視認できるほどになった3機がハイザックであることを確認したからだ。

「現在位置、グラナダ・アンマン間！ 座標は——」

それはアナハイムが差し向けた追っ手ではなかった。民間カラーではない。全身にグリーンをまとったハイザックはティターンズに所属する機体である。

ティターンズの艦隊の方が近くにいたのだ。ミノフスキー粒子の濃度が低いおかげでアーガマとの通信に成功した代わりに、ティター

ンズの警戒網に引つかかってしまったのである。

ドミンゴが背を向けるやいなや、3機のハイザックがビームライフルを一斉に撃ってくる。三条の光線がドミンゴをかすめていく。

威嚇射撃だ。こちらの素性を判別しかねて、向こうも判断を迷っているのだ。

ハイザックの推力は少なくともテスト結果の限りでは、ドミンゴのそれに及ばない。それならば。

ジャンマリーがペダルを一杯に踏み込んだ。バーニアが一斉に火を噴く。ハイザックの小隊がビームライフルを放つ。今度は威嚇射撃ではない。

「当機は現在テイターズと交戦中！ 至急援護を要請する!!」

ヘルメットの中でそう叫ぶと、背後が急に明るくなるのが感じられた。

シート越しに振り向くと、機動力の半分以上を失ったアナハイムのハイザックが、流れ弾に当たって爆発したところだった。だが爆炎を乗り越えて姿をあらわした3機の追っ手を見れば、ジャンマリーには感傷に浸る隙のありようはすもなかつた。

「くそっ！」

降り注ぐビームの雨の中、ジャンマリーはドミンゴを月面に向け降下させていった。

## 第十二話 「あるべき道・後編」

マクローリン設計局長は、みずからの呼び出しに応じてあらわれたアントニオを、まるで汚物でも見るような目で睨みつけながら言った。

「ガルバルディを出した」

人差し指で神経質にデスクを叩いている。

「あれは旧式だが、スピードだけならドミンゴよりずっと上だ。あれなら追いつけるかもしれない」

「間に合うといいんですが……」

アントニオが話を合わせるようにそう返すと、マクローリンが我慢の限界をむかえたように大声を張り上げた。

「君の報告がこんなに遅れなければ、間違いなく追いついていたのだ！ 今朝の段階で報告に来なかつたのは君の落ち度だぞ。こちらの動きがあつた男にばれて知っているのを知っていれば、私の方でいくらでも手を打ってやったものを」

マクローリンは苦々しげにそう言い、ため息をついた。

「現場で処理できれば、それに越したことはないと思つたのです」

「それでハイザックを行かせたというのか!? ハイザックでは全速のドミンゴに追いつけないことくらい、君ならよく理解していたはずだろうと思うがね」

「あの時は私も動揺していましたから……」

「よく言う。先だつて聞いた話では、君はあの男とずいぶん懇意にしていたそうじゃないか。悪いが、私には君があつた男の脱走を手助けしたようにしか見えない。さて、何か弁明したいことはあるかね？」

「それは……」

アントニオが言葉を詰まらせるのとはほぼ同時に、マクローリンの傍らの通信端末が電子音を鳴らした。ついでスピーカーから聞き慣れぬ男の声が飛び出してくる。

『逃亡したドミンゴを捕捉しました——しかし、どうやらテイターンのMSと交戦中の模様です』

にやりと笑うと、マクローリンは端末の方へ向き直った。

「しばらく様子を見ろ。テイターンズが撃墜してくれるのなら、それでかまわん。振り切って逃げるようなら、追いかけて狙撃しろ。できるな!」

『——了解しました』

口許に嗜虐的な笑いを浮かべながらマクローリンがアントニオの方を向いた。総毛立つ感覚にアントニオは目眩を覚えた。

戦場は兵士という、納得すくの者たちが行く場所だとジャンマリーは言った。だが戦場をその胎内に呑み込んだ戦争という名状しがたきものは、気が付けばこんなに近くまでやってきていたのだった。

不可視であるがゆえに知らないのか、知らないがゆえの不可視なのか。ジャンマリーのすぐ傍に、マクローリンのかけ声ひとつで引き金を引くことのできる者が近づいていた。

\* \* \*

ハイザツクの放ったビームが脚部に命中し、衝撃とともにバーニアの噴射口が吹き飛んだ。全天周スクリーンに警報が表示されるより早く、ドミンゴがぐらりとバランスを崩した。

月表面すれすれを飛行していたドミンゴは地面に叩きつけられる寸前で姿勢を持ち直す。そこにさらにビームが叩き込まれる。えぐられた月が舞い散る塵芥となり、視界に踊り、機体に霰が降ったような音を鳴らす。

いくら推進力に格差があっても、ビームライフルの射程を殺すほど距離をあけることができない。ドミンゴははまだ射程距離内に捉えられていた。

逃げ続けるにも限界が近かった。こちらの動きが読まれ始めている。脚部に当てたというのなら、次はもっと上手くやるのに違いがない。

「こちらにも武器があれば……!」

一斉射撃の雨にさらされ、うるさく警報が鳴り響く中、新たにへ所属不明機、前方への警告がスクリーンにあらわれる。一瞬だけ目をやれば、レーダーに新たな機影が1機あらわれていた。

途端、前方から一条のビームが走り、ドミングの左腕に命中した。間接が吹き飛び、肘から下が千切れて彼方に消える。

「くそっ……何機で網を張っているっていうんだ!」

毒づきながらビームが発射された位置を測定し、望遠で捉えた映像を幾重にも拡大する。そこには民間カラーのガルバルディβの姿があった。

「……………」

反射的に機体をガルバルディに向ける。右手に携行している模擬戦用ビームライフルを構えると、案の定ガルバルディは退避行動を取った。民間のパイロットがやりそうな動きだ。本気で敵を落とそうと思ったら回避と同時に攻撃に転じなくてはならない。

一気に距離を詰めると、機体を反転させながら模擬ライフルの銃身をガルバルディの横つ面に叩きつける。退避行動に移るべく脚部バーニアを噴かしかけていたガルバルディが姿勢を崩し、月面に叩きつけられる。

すかさず腕を伸ばすとガルバルディのライフルに手をかけ、そのまま奪い取った。ライフルのコネクターを右のマニピュレーターに接続すると、続けざまに数発撃った。ハイザックの小隊が散開する。

初弾が命中するとは、もとより思っていない。回避したハイザックの1機に狙いを定めると、通過するであろうコースを読んで、また数発撃った。

縦方向に放ったビームが、ハイザックの胴体に一列に穴を穿った。それを見届けるより早く機体をジャンプさせ、すんでのところで別方向からのビームをかわす。その瞬間前方がぱっと明るくなり、ハイザックが爆発するのを視界の隅に捉えた。

「あと2機!」

降下しながらビームライフルを放つ。充分引きつけてからバーニアを噴かし、機体を横滑りさせる。ビームが脇をかすめていく。

警告音が鳴る。後方の様子を表示するモニターにハイザックの姿を認め、機体を反転させる。

再び内蔵がずれてしまうような感覚。それでも死ぬよりはましだ。



武装をヒートホークに持ち替えたハイザックが間合いを詰めてくる。だが動きが直線的すぎる。テイターズズがいかにかエリート部隊であろうが、宇宙暮らしはこちらの方が長い。どうせ右か左に跳ぶのだと思っているのだろう。それなら――。

脚部バーニアを噴かすとドミンゴを後方へと跳ばす。片足のバーニアを損傷しているせいで、その軌道がトリッキーなものになる。ヒートホークが空を切り、ハイザックがバランスを崩しかける。頭のとっぺんを見せたところにビームライフルを叩き込んだ。

月面に花のような火の玉が咲いて、再び地面がえぐり跳ばされる。幾層にも積もった埃が月の表面ごと巻き上げられて、視界が煙に包まれた。

「――あと一機！」

降り注ぐ土砂の中、煙幕を脱出するべくバーニアを噴かす。その瞬間、ひととき大きな質量が衝突したような鈍い音が鳴り響き、ドミンゴが苦悶するような音をたてた。

「今度はなんだ!?!」

ジャンマリ―は薄れ始めた煙の中に民間カラーのガルバルデイを見た。模擬ライフルに頭部を潰されたガルバルデイが、ドミンゴを逃がすまいとその脚にすがりついている。

「危険だ、離れろ――ええい!!」

ガルバルデイのマニピュレーターに狙いを定めてライフルを放つと、その手を振り払い、大急ぎで機体を反転させる――同じ場所に長居しすぎた。おそらく狙いをつけられてしまっただろう。

それは当然の道理だった。いまだ漂う土煙を唐突に一条のビームが切り裂いた。その光はドミンゴの胸を貫き、背部プロペラントに到達した。

次の瞬間ドミンゴは巨大な火の玉と化した。盛大な爆発は推進剤を瞬く間に食らいつくし、だから爆炎はすぐに消えた。

\* \* \*

『ドミンゴの撃墜を確認しました』

通信端末に届けられたガルバルデイからの報告に、マクローリンは

いかにも満足げな様子を見せた。慇懃な調子で椅子に腰掛けなおすと、敵かな口調で言った。

「よろしい、上出来だ。テイターンズの連中はどうしている——まさか、残骸を回収されたりしていないだろうか？」

『3機おりましたが、その内2機はドミンゴに撃墜されました。1機残りましたが、単機での回収は困難と見て、さきほど帰投したようです』

「ますますよろしい。残骸を回収するのにこちらからランチを出すから、到着したら回収を手伝ってやってくれたまえ。外装など、特徴となるものはくれぐれも残さないように」

「——了解しました」

通信を終えると、マクローリンはアントニオの方に向き直った。口許に笑みを浮かべながら、立ちつくすアントニオを見上げる。

「聞いてのとおりだよ、カナーレス君。ドミンゴは撃墜されたそうだが、アントニオの耳にだって、もちろん彼らのやり取りは聞こえている。すでにアントニオは小刻みに震えはじめている。

「まったく危ないところだったよ」

マクローリンが嬉しそうに言う。

「テイターンズがたまたま傍にいてくれて、本当に幸運だったな。あの男がエウーゴに辿り着いていた時のことを考えると、まったく今でも汗が噴き出すよ……テイターンズにMSを横流ししたなんて知れてみる、我々の首がいくつ飛んだって足りないぞ。いやまったく、よかったよかった」

言いながら、例によって別の仕事にとりかかると準備を始める。

「君ももう戻ってよろしい……終わりよければすべてよしだ。いやはや、君も命拾いしたもんだな」

## 第十三話 「果ての先」

一瞬のようでもあり、それでいて様々な痕跡を残していった数ヶ月が終わろうとしていた。ジャンマリーが火花のように弾けて散ったあの日から数日が経過していた。

ジャンマリー・ロラン。ティターンズのパイロット2名。アナハイム・エレクトロニクスのパイロット1名。合わせて4名が命を落とすことになった戦闘は、グラナダ・アンマン間という都市近海で展開されたこともあって、即座にマスコミが嗅ぎつけることとなった。

アナハイム月面工廠の正面玄関にはリポーターやTVカメラが群れをなし、広報課は蜂の巣を突いたような騒ぎとなった。事態は泥沼の様相を呈し、広報部が「アナハイムのパイロットは戦闘に巻き込まれただけで、いっさい事件に関与をしていない」とコメントすれば、次の日には月面定点観測カメラが捉えた戦闘の様子がニュースに流れるというありさまだった。

最終的にアナハイム・エレクトロニクスは、世論に対する誠意を示すための記者会見を開くことを余儀なくされた。そこにはグラナダ支社代表取締役をはじめとした重役たちの姿があった。

末席では、マクローリン設計局長がしおれた顔をして汗をかいていた。

「もうすぐ記者会見が始まるみたいよ、見なくていいの?」

「見ないよ。僕には関係ない」

ジャンマリーが撃墜された日から、一度もドナには会っていないかった。最後に交わした会話が随分険悪なものだったこともあり、正直プライベートで会うことはもうないだろうと思っていた。

だがアントニオの予想はずれた。彼の気持ちを知ってか知らずか、ドナは記者会見が開かれるというニュースを携え、まるでいつもどおりのような顔をして彼の部屋を訪れたのだ。

仕事帰りらしく、髪はアップにまとめられたままだった。もしかしたらへプロジエクト・ドミンゴの事後処理業務に忙殺されているのかもしれない。アントニオの目に、彼女の表情がすこし疲れているよ

うに見える。

それに引き換え、アントニオは無為に日々をやり過ごしていた。今朝はひげも剃っていない。外出する用事がないからだ。

事件のみみ消しをはかるためデータはすべて抹消され、書類の類は焼却処分が付され、最初から存在していなかったかのようにへプロジェクト・ドミンゴのチームは解散した。

アントニオは加熱する報道が沈静化するまで自宅待機を命じられるとともに、プロジェクトの終了による前倒しの任期満了を宣告され、それにもなつて地球へ帰還する辞令を与えられていた。

すぐグラナダに呼び戻してやるなどとマクローリンは言っていたが、それを期待するのは野暮というものだろう。プロジェクトの総責任者だった彼には相応の責任がある。いずれそれに見合った処分が下されることになるだろう。

ドナの話では、スウィートウォーターあたりに飛ばされるのではないかと社内でもことしやかな噂が流れているという。今となつてはマクローリンの進退の方があやうい。

「何見てるの?」

背中を向けたまま端末にかじりつきっぱなしのアントニオを咎めるように、ドナが背後から画面を覗き込む。

「何ってニュースサイトだけど……いや、別に大したものじゃないよ」「ふうん?」

画面には、端から端まで聞いたこともない人間の名前が列挙されていた。

それはエウーゴ・地球連邦軍両陣営の、ここしばらくの戦闘で死亡した者の氏名リストだった。

数度にわたる戦闘と、わけてもモンブランが撃沈されたせいで、おびただしい数の名前がそこに集められていた。

アントニオはその中にジャンマリーの名前を見つけていた。

ジャンマリー・ロラン。エウーゴ。最終階級、准尉。地球降下作戦において戦死。

他の兵士たちがそうであるように、彼に与えられた情報もその程度

のものであった。だが、これだけでも遺族にとつては重要な情報となるのかもしれない。無論アントニオにとつても示唆に富む内容である。

地球降下作戦において戦死。

手回しのいいことだと思つた。こんな情報が報道に流れているのなら、市民の関心が失われてきた頃に何らかの形で事件はうやむやにされるに違いない。何より今回の騒動にはテイターズが一枚噛んでいる。いざとなればどうとでも握りつぶすことができるだろう。記者会見など、とんだ茶番なのだ。

「ねえ本当に記者会見、見なくていいの？」

「いいんだ。見たつてしようがないからね——それより僕は地球に戻ることになつた」

思わぬ台詞にドナが目を丸くする。

「戻るって、いつ!?!」

「自宅待機が終わつたらチケットの予約をしようと思つてる。だから君と会える機会も、もうそんなに多くはないと思う……ああ、それより腹が減つたね。せつかく会いにきてくれたことだし、いつしよに出かけようか」

——そう言つて立ち上がったアントニオの姿を見て、置いていかれまいと慌ててドナが立ち上がる。

「いつもの店でいいだろ? 結局、僕はまだロブスターを食べずじまいのままだ」

「……地球に帰るって、でもすぐに戻つてくるんでしょ?」

「どうだろう。マクローリン局長があの有様だからね、何ともわからないな」

「それじゃあ、もう会えなくなるってこと!?!」

アントニオは困つたような顔をして笑つた。あれだけ辛い気持ち味わつたのだから、もういいじゃないかという気分だった。辛いのはもうたくさんだ。

「大丈夫だよ。僕は君のことを忘れてたりしない……なあ、湿っぽいのはよそう。いつだったか話したじゃないか、君にもラテンの血が流れているんだろう?」

「そういうあなただつて、ちつとも情熱的じゃないわ。すっかり陰気になつてしまつて……」

アントニオが振り向くと、ドナはまだ端末のあたりに立ちつくしていた。笑おうとしながら泣きそうになっているような、何とも気持ちをはかりかねる複雑な表情をして、廊下に立ったアントニオを見つめている。

ああ、これは長くなりそうだ——彼は心のうちでため息をついた。どれだけ経験を重ねようが別れ話というのは憂鬱で、面倒くさくて、疲労がたまる。決して慣れることはなく、それだけに避けてとおりたい代物だ。

だいいち恋愛をあれこれしたい気分ではなかった。さばけた気分で食事をとつて、そのままさよならしてしまいたかった。じめじめしたことを言いだしそうなドナがうつとおしかった。

だから、そんな彼にドナの言葉は意外なものとして響いた。

「あたし、これまであなたと話したことをあれこれ思い出して、いろんなことを考えていたわ」

アントニオは半ば無意識に背筋を伸ばしていた。

「でも駄目なの、何かに気づけたような気になつたと思つたら、やっぱり勘違いなんじゃないかと思つたりして、堂々巡りで抜け出せないの——だから、あなたに教えてほしいと思つてる。何があつたのか、あなたに教えてほしい」

「何が……それは明日の朝ニュースでも見れば、記者会見のダイジェストが出るだろうから、それを見てくれればいい」

「そうじゃないわ、あたしが知りたいのはあなたに何があつたのかつてこと。グラナダに来てすぐの頃と比べたら、あなた変わったわよ」

どこか責めるような、いまにも取り乱してしまいそうな口調でそう言う。

「変わったつて、僕が？　そうかな？　そりゃまあ、少しは変わったかもしれないけど」

「ジャンマリーの影響なんですよ？　一体彼との間に何があつたの、何を吹き込まれたつていうのよ!?!」

「吹き込まれただなんて、彼を悪者みたいに言うのはやめてほしいな」  
「ごめんなさい……」

ドナがうつむく。

「たしかに彼との間には色々なことがあったよ。話してもいいけど……それは、本当に聞きたいの？」

しばしドナが黙る。顔を上げると、アントニオを見つめる。真剣な眼差しが彼女をいつもとは違う表情に彩っている。その眼差しが何かをへ見よう」と懸命になっている。

アントニオは目をそらさない。やがて腹を決めたようにドナが口を開いた。その声は小さく、そして震えていた。

「何だか、知らないうちに大事なことをたくさん取りこぼしている気がするの。あなたやジャンマリーが見ていたものを、あたしだけ見逃しているような……わからないことが沢山あるわ。まだロールアウトしていなかったはずのドミゴがどうしてティターンズに運用されていたのか、どうしてジャンマリーは原型機を持ち出したのか……いや違うわね。あたしが知りたいのはその中であなたが何を感じ、どう変わったのかということ。あたし、あなたに置いていかれたくない。あなたが何かを感じたというのなら、同じように何かを感じられるあたしでありたい——だから真剣に聞きたいと思ってる」

「君がそこまで言ってくれるのなら、それは話さなくちやいけないね——それじゃ出かけようか。長い話になるだろうから、食事をしながらゆっくり話すことにするよ。オランダもののジンでも呑めば、僕も上手に話せそうな気がする」

そう言いながらドナに微笑みかけ、アントニオはドアを開けた。

〈おわり〉